ジエー、バチエラ著

アイヌ及其說話

上編

東京 教文館

序

夫れ事實は探究を經て眞を得、想像に由り實を失ふ、アイヌの事を記する著書の、既に刊行せられたるもの頗る多し、然れども其精探細究の餘に出だるもの少し、故に文趣味あり、事珍奇なりと雖、彼の眞を知り、實を詳にせんと欲する者の爲には、遺憾なき能はず、而して本書は實に此遺憾なきに庶幾しと信ず、

本書の著者バチエラ氏は、英國人にして、夙に日本國に來り、アイヌと相共に起臥する二十餘年、其間能く彼の風俗習慣言語に精通し、アイヌ語を用ゆること、恰も其

自國語の如くにして、毫も苦澁する所なく、實見親炙の事實を、精探細究したる結果、本書を著したるに由り、本書記する所は、實に據り眞を寫したる、最正確のものと謂はざるべからず、

本書の原本は、英語にて記し、Ainu and their folk-lore と題す、本書は特に日本人の爲に譯されたるものにして、其上編なりとす下編も亦相續ひて譯出せられんとす其記する所は、題名の如く、アイヌ及其說話の外に出すと雖、日本國の先住者たるアイヌの流風遺習の日本人風俗習慣中に存するものあり、故に本書に依りて、啻アイヌの風俗習慣を知るに止らず、日本人風俗習慣の根源由來を明にする所尠からず、而して又アイヌの爲には貴重なる古事記なりとす、

バチエラ氏はアイヌ語の外、尙又日本語にも能く精通し談話頗る巧なり、余は拙文誤譯の責を免れんとするに非ざれども、本書はバチエラ氏の口述する所を、余が筆記せしに過ず、今本書を刊行するに當り、一言を以て序とす、

明治三十三年七月三十日

著者　助手

アイヌ人及其說話　上編

目錄

第一章　序文　一頁……四頁

本書の事項。本書を印刷する理由。及辯解。本書の性質。並其範圍。

第二章　アイヌは本居　五頁……九頁

アイヌは始め日本全國に居住す。富士山はアイヌの稱呼なり。アイヌ蝦夷に驅逐せらる。アイヌは人肉食人種なり。

第三章　土雲即穴居人　一〇頁……一六頁

穴居。穴居にて人の葬らるゝ事。千島人の石器及陶器。穴居人に就てアイヌの口傳。アイヌ人も穴居人なるやの事。

第四章　アイヌ人口減少の近因　一　七頁……二　七頁
アイヌの首府。同族の戰爭。網走に於ける不意の出來事。食物の變化。氣力の喪失。衛生及醫療智識の缺乏。
第五章　世界の創造　二　八頁……四　六頁
世界創造の概念。世界創造に於ける鵜鶘の補助。蝦夷の創造。谷地の惡魔の本源。惡の木アカダモの事。
第六章　宇宙學　(イ)地上地下　四　七頁……五　七頁
世界の形象。世界は魚の上に基礎せる。干滿潮の原由。海嘯の事。地震の事。タアタラス即地獄の事。地下の極樂。
第七章　宇宙學　(ロ)蒼穹　五　八頁……七　二頁
天の限涯。天に就て有形語の使用。日月及其口傳。月界に住する人。日と烏。星と銀河。天より生物の降りし事。
第八章　アイヌイナ及アイヌの名稱を論ず　七　三頁……八　〇頁
アイヌの祖先はアイヌイナか。アイヌイナと云ふ語の由來。アイヌの名稱はアイノにあらず。アイヌの多毛なる事。
第九章　アイヌの元始　八　一頁……九　三頁
前言。オキクルミの事。神の人間を造り給ひし事。人間の造らるゝ時獺の働の事。アイヌの元始の口傳。アイヌの祖先に動物おりし事。アイヌ熊より出生せし事。アイヌの動物崇拜に於ける鷲の事。
第十章　ギウピット及オキクルミ Okikurumi の事　九　四頁……一〇一頁
鵜鶘キウピットにありし事。キウピット夫婦の務を敎ゆる事。オキ

クルミ女を愛する事。義經を拜さざる事。平取村に於ける義經の祠の事。
第十一章　柳の樹　一〇二頁……一〇八頁
動植物崇拜の解明。人命の所在。人の生れし時柳樹のイナヲを造る事。人命柳の樹に結び合ふ事。
第十二章　幣及イナヲの概說　一〇九頁……一一六頁
幣の解明イナヲを造る時。イナヲの置所。イナヲの鮮明。物体崇拜の事。アイヌの偶像教。
第十三章　重要なるイナヲの物質　一一七頁……一二六頁
家のイナヲ。此イナヲを造る事。此イナヲを聖別する事。火の神の夫。綸れたるイナヲ。垂れたるイナヲ。前後を削りたるイナヲ。
第十四章　チカップポチコメシユプ Chikappochikomesup イナヲの事　一二七頁……一三三頁
此物質の目的。其形狀。木の種類。其上に食物を置く事。病の性質。
第十五章　イナヲは生ける仲保者たる事　一三四頁……一四四頁
イナヲは使者なり。酒を造くるにイナヲを用ゆ。イナヲの地獄に送らる事。惡魔を拜むる事。病人の爲に造るイナヲ。萩イナヲ。削り屑イナヲ。
第十六章　アイヌの住家　一四五頁……一六〇頁
住家の生命。住家の心。住家を造る事。住家を祈る事。聖別なる家内の東隅。倉庫の事。火事を恐るゝ事。幌別の家屋。新宅の祭。住家を燒く事。
第十七章　家具　一六一頁……一七一頁
爐棚。ペンリウクアイヌの出來事。自在。木皮鍋。匙。鬚揚箸。椀類。

第十八章　衣服　一七二頁……一七八頁
アッシ。針仕事。男の上衣。脚絆。冠り物。前垂。冬服。雪履。
第十九章　寶物及粧飾物　一七九頁……一八八頁
漆器。刀劍。婦女粧飾物を好む。指環。耳環。耳環は植物崇拜の遺習。冠り物は植物崇拜の遺習。
第二十章　文身の事　一八九頁……二〇二頁
文身の習慣廢め難し。文身の仕方。文身に就ての口傳。穴居人文身を爲さゝる事。文身せざるを戒む事。文身の由來。蛙に文身ある事。蛙の名の源。雀の文身せられし事。雀の饗應と烏の死する事

繪畫目錄

(一) 著者及酋長ペンリ……一頁
(二) 雜種の女……四頁
(三) 伊斯都都伊(石の劍)……一頁
(四) 穴居人の住家の略形……二頁
(五) 歷史の前の陶器……三頁
(六) 千島人穴居の雛形並穴居の外形……四頁
(七) 石の小刀……五頁
(八) 石斧……八頁
(九) 頭大棍捧……九頁
(十) 雜種の男子……二一頁

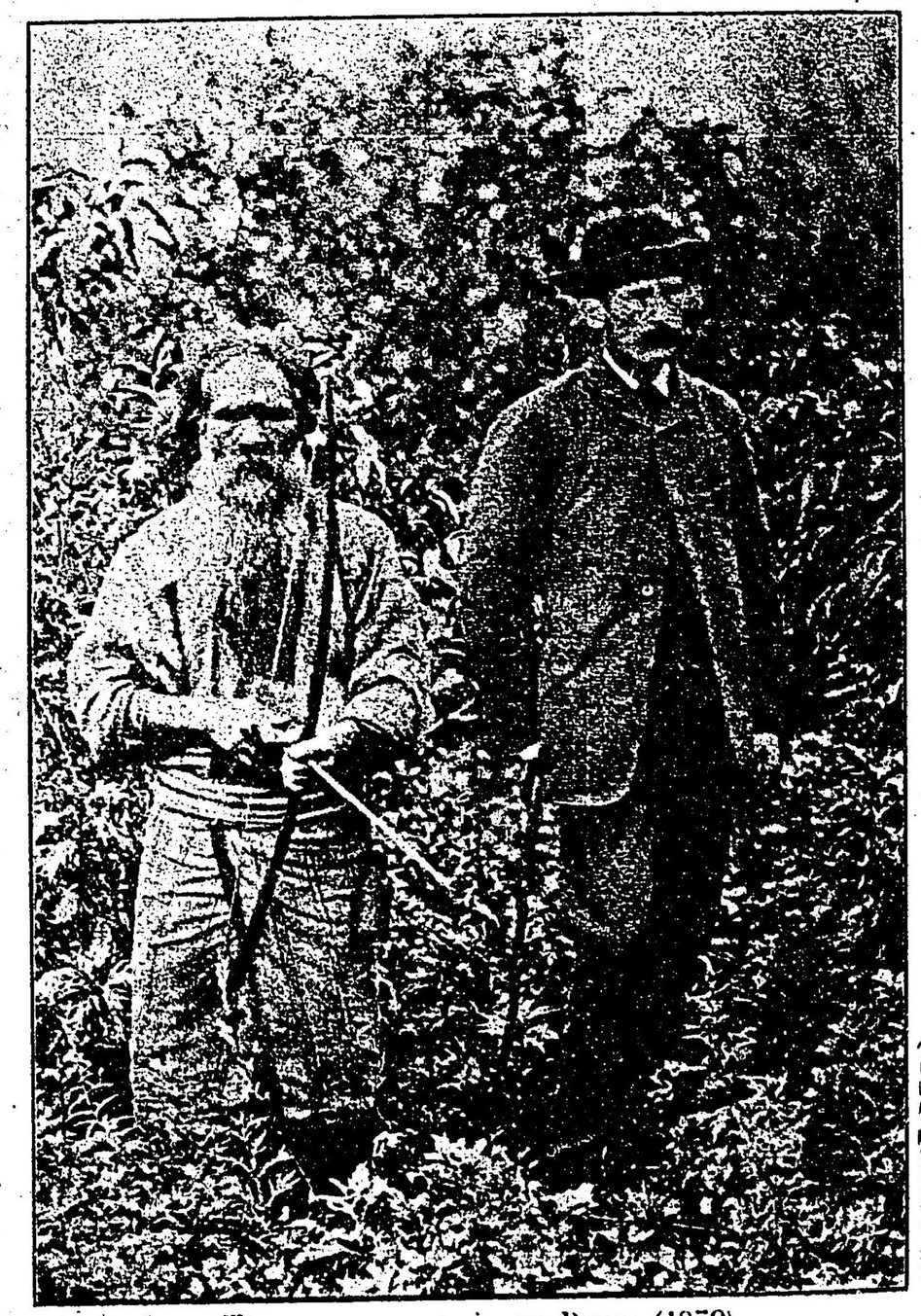
(十一) 基督教信者男女の集……二三頁
(十二) 純粋のアイヌ……二七頁
(十三) 著者と四人のアイヌ……三一頁
(十四) 著者の妻と數人の女……三七頁
(十五) 札幌病舍に居る病人……四一頁
(十六) 多毛のアイヌ……七九頁
(十七) 平取にて撮りし寫眞……九一頁
(十八) 柳樹の祟拜物質……一〇五頁
(十九) 幣即イナヲの集……一一一頁
(二十) 海岸に建たる幣……一一三頁
(廿一) チセコロイナヲ即家を保つイナヲ……一一八頁
(廿二) イナヲチトパ即家を保つイナヲの幹……一一九頁

(廿三) キケチノエイナヲ……一二一頁
(廿四) キゲパラセイナヲ……一二三頁
(廿五) チエホロカケツプ……一二五頁
(廿六) チカプポチコメシユプ……一二九頁
(廿七) イヌンパシユツイナヲ……一三六頁
(廿八) ニイト子イナヲ……一三七頁
(廿九) シユツイナヲ……一三八頁
(三十) ハシユイナヲ……一三九頁
(三十一) 樺太アイヌのイナヲ……一四一頁
(三十二) イナヲキケ……一四二頁
(三十三) アイヌの部落……一四四頁
(三十四) チセサンペ即家の心……一四九頁

(三十五) アイヌ住家の平面圖……一五一頁
(三十六) アイヌの住家、態の圖及倉……一五二頁
(三十七) アイヌ屋根の日本人住家……一五四頁
(三十八) アイヌの倉……一五九頁
(三十九) 小刀の鞘……一六二頁
(四十) 鮭鱒の卵を碎す臼……一六二頁
(四十一) 匙子……一六三頁
(四十二) 櫻の木皮を以て造られし鍋……一六三頁
(四十三) 匙子……一六四頁
(四十四) 通常用の鬚揚箸及禮式用の鬚揚箸……一六五頁
(四十五) ヲサ及機……一六五頁
(四十六) 臼及杵……一六六頁

(四十七) 煙草入及タラ……一六八頁
(四十八) 鞦韆……一六九頁
(四十九) 椀、灰掻、……一七〇頁
(五十) 自在、柄杓、……一七〇頁
(五十一) アイヌ女の機織……一七二頁
(五十二) 女子の縫模樣ある上衣……一七四頁
(五十三) 婦人の冠物……一七五頁
(五十四) 寡婦の冠物……一七五頁
(五十五) 前垂……一七五頁
(五十六) 脚絆……一七五頁
(五十七) アイヌの冬服……一七六頁
(五十八) 皮履……一七六頁

(五十九) 樺太の雪履……一七七頁
(六十) 蝦夷の雪履……一七七頁
(六十一) アイヌの寶物……一七八頁
(六十二) イコロ……一八〇頁
(六十三) 古劍……一八二頁
(六十四) 狐崇拜の冠……一八五頁
(六十五) 鷹崇拜の冠……一八六頁
(六十六) 口手指腕に文身ある婦人……一八九頁
(六十七) 粧飾せる婦人……一九三頁
(六十八) 老人と其縫摸樣ある上衣……一九九頁



(青山學院實業部印行)

THE AUTHOR AND CHIEF PENRI (1879).

著者及酋長ペンリ

アイヌ人及其說話 上編

英國人 ジョン、バチエラ著

第一章 序文

本書の事項。本書を印刷する理由。及辨解。本書の性質。並其範圍

昨年或日札幌農學校に奉職せらるゝ我友人宮部博士著者に曰く若し君がアイヌの事に關し今迄爲せし所の演說と種々記述せし多くの事を悉く集めて之を一冊とせば可ならんと思惟すと其後他の人々も亦同樣の事を請へり而して日本人は格別に和文を以てすることを請へり著者は著作の才に短にして能く其任に當るに足らざることを自から知り且其事大にして容易あらざる請なりと雖懇親なる友人の至囑

にして背き難きものあり又此請の如くするときは今迄爲せし記錄の誤謬と僻見を改良するを得又尙更に他の奇異なる事を著はす機會を與ふるなきにあらず讀者よ今二たびアイヌの事に就き著者は讀者を煩はす此辨解を納らるべし

本書は表題に示す如くアイヌ人及其說話を記述し決して他の人の習慣及說話に涉らず其包含せる事項は悉く事實にして想像にあらず著者が第一著に集蒐せしものは他より借來りたるもの即傳聞に由り得たるものにあらず本書は全くアイヌの實話にして毫も著者の說話を加へず著者自からアイヌ語を翻譯し後に於て見らるゝ如くアイヌの思想說話及口傳を記述せしものにして毫も英國の事抔を交へて記述せしものにあらず

然れども本書に論ずる說話は唯蝦夷アイヌの事のみに屬すれども著

A HALF-CAST WOMAN.

雜種の女

（青山學院實業部印行）

者は樺太島アイヌと親しく接せしは僅かに四ケ月に過ぎず故に該島の住民の説話は實正或は眞確ありと自から之を保證する能はず故に本書には樺太アイヌの事は稀に記載するのみなり又蝦夷アイヌの事と雖其説話を悉く皆記載すること能はず只著者は沙流、室蘭、有珠、親冠、石狩、十勝、釧路及網走等の地方に於て著者自から集蒐せし事柄のみを本書に記載せりアイヌの説話等を研究するに意ある人あらんには尚許多の事項を集蒐するを得べきは勿論なりと雖著者は此の如き事に費す可き時間を有せず故に本書を以て著者がアイヌの事を論ずる最終の言と爲さんと欲す(然れども場合に由りて今後も少しく演説することもあるべし)

著者は本書に其自著に係る(The Ainu of Japan)を引用し又其中より摸寫せし繪畫も亦寫して之を挿入せり然れども讀者は之を當然の事なり

とせらるべし何となれば本書の材料は各所より採集せしものなれば
なり

本書は其目的第一日本人の爲に著はせし故日本語にて述記せり何と
なれば深くアイヌの事を研究せんと欲する人は蓋し多くは英語より
も日本語を讀むを便利とするならんと思ふに因る而して本書は今迄
著はせし事を蒐集せしに過ぎざれども本書に因りて尙多くの新事實
を發見し又疑問を解釋する便なきにあらざるべし又格別に本書は動
植物崇拜 Totemism 物体崇拜 Fetichism 禁令 Taboo 靈魂崇拜 Animism 宗教 Reli
gion. 等に關係ある事項を説明するに因り人種學者哲學者等にも多少
の裨益する所あらば望外の幸甚なりとす

終に一言す本書を著はすに著者の口にて述べたる拙き言を巧に記さ
れし助手の勞を謝す

第二章　アイヌの本居

アイヌは始め日本全國に居住す。富士山はアイヌ
の稱呼なり。アイヌ蝦夷に驅逐せらる。アイヌは人
肉食人種なり。

現今はアイヌ元始の歴史を詳かにすること能はず他國の人種の如く
アイヌ人種も亦同じく其確實にして信を置くに足るべき歴史の事跡
を採集すべき時期を失ふたればなりアイヌの口傳に依れば古昔は現
今よりも人口甚だ數多なりしと云ふ又昔時琉球、五島及臺灣を除く外
アイヌ人日本全國に住みしと云ふアイヌ人は琉球及臺灣の地名を知
らざるのみならず此等の地方に關しては少も遺傳の存する者なしと
雖大八洲の地名には純粹のアイヌ語にして更に疑なき者多きを見る

自然の順序として日本國の地名は皆日本語にて彼の有名なる富士山も亦日本語なりと信ぜらるべしと雖其實は日本語にあらずしてアイヌ語に相違あしと信ず富士山を或は不二山或は芙蓉山と稱すと雖此等は詩歌的の稱呼なれば實事を論ずるに當りては詩歌的或は感情的の語を採用ゆること能はず又富士山の名稱は現今に於て尙日本語なりと云ふ人多かるべしと雖將來語學の進歩するに從ひ之をアイヌ語なりと論定せざるべからざるに至るべし富士山を不二山と稱して二品なきを意味し或は富士と稱するは支那文學上の名稱にしてアイヌ語にて云ふ[ふじ]には此の如き意義あらざるなり

此の如く云ふ時は恐くは讀者は著者に對し其理由を擧示すべしと要求せらるべしと信ず然れども著者は餘り冗長の論を以て讀者を煩はすを好まず故に唯茲にアイヌ語を擧げて之を證すべしアイヌ語にて

「ふじ」Fuji と云ふは[ふち]Huchi の轉訛にして日の意味なり而して此語の眞義は(一)女神(二)祖母(三)日の神(四)火等の多義あり此女神は或はフチカムイ Huchi Kamui 即神なる祖母と云ふ意義あり或はイレスフチ Iresu huchi と云ひ即我等を養ふ祖母と云ふ意義あり而して此女神は屢々禮拜せらるゝことあり此事に關しては多少他に記述するを以て此處に詳論せず又富士山は老火山なりと記憶せらる故に大古其噴火する時に於て彼の壯麗なる日本帝國第一等の山を以て神ありと尊信するはアイヌの如き者に於ては當然の事なるべし

大古より大八洲にアイヌ人の存在せしにはあらざるべしと雖地名の多くは今日も尙蝦夷に於てアイヌの使用するアイヌ語なり又現今日本國に住居するアイヌ人は昔時より住居せしものなれども現時の人口は壹萬六千人に上らずして漸次減少し其中には雜種も亦數多あり

老人の話に依れば古昔アイヌ人和人と戰ひ敗北して退き蝦夷及千島等にのみに住居するに至りしありと云ふ此話は實に日本國の歴史に適合するを以て信ずべき事ありと思ふ

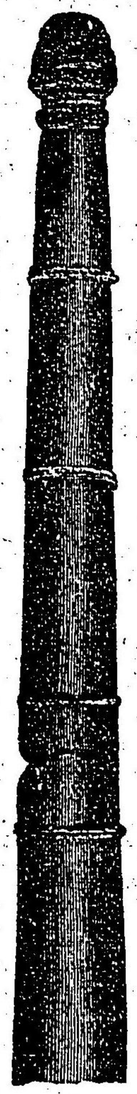
彼の賞美すべき古代の傳記を載錄せる古事記に依れば後代に於て土雲と稱する者あり神武天皇は多く彼等を討滅し給へりと古事記に曰く「自其地幸行。到忍坂大室之時。生尾土雲八十建。在其室待伊那流。故爾天神御子之命以。饗賜八十建。於是宛八十建。設八十膳夫。每人佩刀誨其膳夫等曰。聞歌之者。一時共斬。故明將打其土雲之歌曰。意佐加能。意富牟盧夜爾。比登佐波爾。岐伊理袁理。比登佐波爾。伊理袁理。登母。美都美都斯。久米能古賀。久夫都都伊。伊斯都都伊。母知。宇知豆斯夜麻牟。美都美都斯。久米能古賀。久夫都都伊。伊斯都都伊。母知。伊麻宇多婆余良斯。如此歌而。拔刀。一時打殺也」とあり又其後日本義を讀みしに昔和人アイヌと戰ひ退かしめしこと見ゆ故に日本の古代史に依ればアイヌ人の人口の減少せし原因は戰鬪なること明あり且該書に依ればアイヌ人を夷と稱し野蠻人なりと云ふ此他尙我等アイヌ人の口傳を信ずるを得ばアイヌ人は實に野蠻にして生にて魚類肉類を食するのみならず人肉をも食せしなり此事に關し著者の聞きたる口傳に曰く「アイヌの祖先は人肉食人種なりし故生にて熊肉鹿肉魚肉を食ふのみならず己の親戚と雖之を殺し生にて其肉を食ひたり然るに神なるアイヌイナ Aioina. 天より降りて捕魚鎗、弓、矢、及鍋等を製作することを敎へ且魚類肉類は食前必らず料理して食ふ可きことを敎へたり其人々互に相殺して其肉を食ふは賊に惡しとて大に戒しめたり又アイヌイナはアイヌに漁獵をも敎へたり故にアイヌは其後人々互に相殺し人肉を食はざるに至れり

第三章　土雲即穴居人

穴居。穴居にて人の葬らるゝ事。千島人の石器及陶器。穴居人に就てアイヌの口傳。アイヌ人も穴居人なるやの事。

アイヌの口傳に依れば大古アイヌの祖先曰本國又は蝦夷地に住し時其近傍に穴居人の住しことあり此等の人々をコロポックル Koropokgu-ru と稱す即穴に住む人の義なり或はコロポックカムイ Koropok Kamui と稱す穴に住む神の義なり而してアイヌは當時此等の人種と戰ひて敗北せしなりと云ふ抑々我等蝦夷地の各處に於て嘗初人の住居せし場所に圓穴の遺跡の多く存するを見る其圓穴の大さは凡深三尺幅十尺乃至十二尺にして或は幅十八尺乃至二十尺位のものもあり此等の

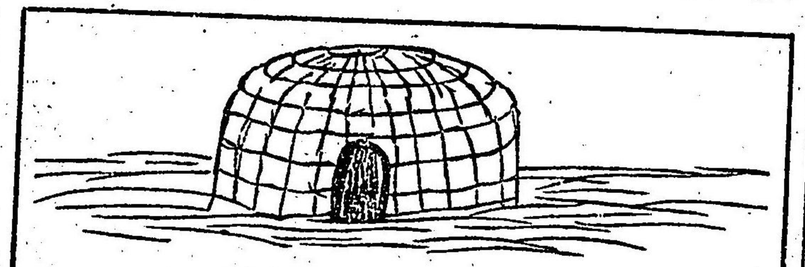
穴には必らず或人種の住みしことゝ知らる何となれば其近傍の地を發掘すれば掃溜あり又は其邊に多少の古き陶器、石斧、石鏃、石鎗、尖頭或は獸骨鹿角等を發見するを得ればなり此圓穴の形狀を視察するに其中に住みし人種はシベリヤのエキスモ人の雪家の形狀にして圓形なりアイヌの口傳に依れば其家は圓錐形にて穴の両端に細長の木を斜に交叉し其交叉せる所を木皮又は蔓條を以て結束す又此木の上に木皮又は草を布きて土を置き雨雪を凌ぎ寒冷を防ぎ其中に住みし



伊斯都都伊（石の劍）

Staff made of flint

人々は五六個所に爐を作りて其間に就眠せり又彼等の着服は獸皮なりしと云ふ(併し著者の掘り見たる穴には唯一個の爐の外なかりし)余は一千八百九十八年に平取村に於て此の如き穴の底の恰も火爐の存せし所を三尺程發掘せしを見しが人の髑髏を掘出せり然れども他の場所に於ては未だ曾て人の

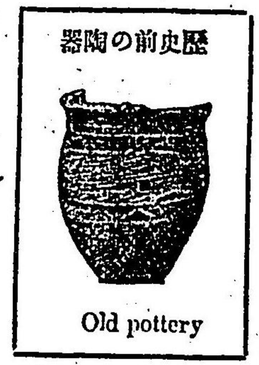


穴居人居住の略形

骸骨を發掘せしことあるを聞ざりし故此穴を墓なりと言ふこと能はざりしが今其髑髏を發掘せし故穴居人は他の國の人種の如く或時は爐下に人を埋葬することありしならんと思考せり

著者思ふに今の此穴居人はアイヌ人種に近からんと信ず即近頃シコ

タン又は蝦夷地のアイヌよりも体格矮小にして弱く不養生なり近時のアイヌ彼等を指しコロボックル即穴居人と稱す然らば五十年より以前に居らざる千島の人種は穴居せしならん穴居人は必らず日本人又はアイヌ人よりも其身長短矮なりと信ずべき理由あり何となれば和人の口傳に依れば昔小人ありと又アイヌの口傳に依れば小人の身長は三尺長は只一寸程なり彼等の雨に逢ふか又は敵に攻めらるゝ時は路の葉下に其身を隱すと云ふ



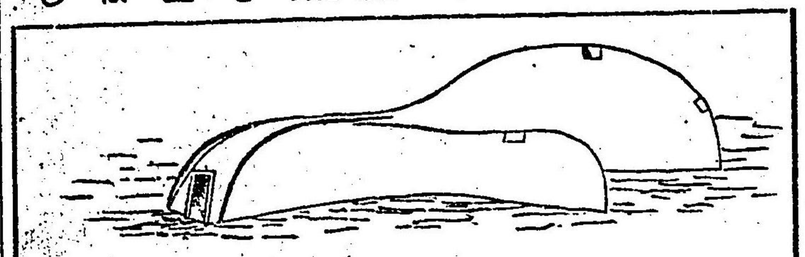
歴史前の陶器

Old pottery

アイヌの此の人々に關する口傳は左の如し

「大古我等の中に穴居人種の住みしことあり其人は身体頗る矮小に

して唯一個の蕗の葉の下に十人程は集り居たる由扨彼鯨捕に行くときは木の葉や笹の葉を縫ひ小舟を造り針を以て魚を捕るを常とす一尾の鯨を捕れば五艘或は十艘の舟の人々皆集り其全力を盡して之を海岸に引揚げ海岸に立てる多くの人々木又は鎗を以て鯨を殺す而し

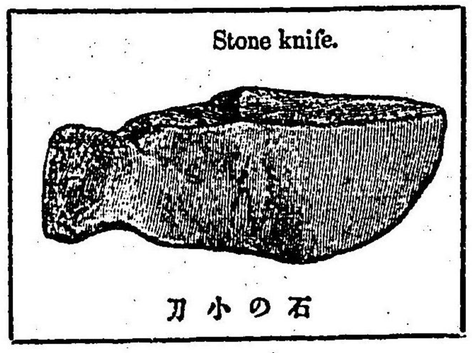


穴居の外形

て驚くべき哉此の如き小き神なる人間なりと雖時としては大なる鯨さへも捕殺することを得たるを見れば誠に此の穴居人種は神様なりとぞ」

又アイヌの口傳に依れば其穴居人は石器及陶器を造り使用せりと是れ信を置くに足るべし何となれば上來記述せる如く其住

居の近傍に於て此等の諸器を掘出すを以てあり然れども多くは其祖先等の陶器又は石器を造りしことを知らずと我等に告れども又或人の話に依れば其祖先等は之を造りたりと云ふ現今と雖アイヌの小兒等の茶碗又は鉢の如きものを泥土を以て造り草又は木の片屑を以て模樣を着け粧飾を畫くを見る近年洪水の時新冠川の如く造りしものなり他のアイヌ人の話に依れば其祖先等は石鏃尖頭を使用して製造せし石の鎧を所藏する者ありと云ふ故に著者は所謂



石の小刀

邊より一個の石器露出せりアイヌ之を見てイワンアットウシベ Iwan ut ushbe と云ふ即之を譯すれば六個の手ある器と云ふ義あり其器の上端に六個の穴あり之を持つ爲めに糸を入れる

穴居人及アイヌ人も皆石器時代に住居せし者にして其時代は遙か隔りたる古昔にあらざる時代なりと信ず

又或アイヌの話に依れば我等の當初の祖先等は天幕の如き家を穴の上に造りしものなりしが後世に至り和人の造家法を見て之を摸倣せしなりと云ふ而して樺太アイヌは穴居人の子孫なりと云ふと雖今日現在の家屋は和人又はエスキモの家屋に模倣せるものとは云はざるあり茲に驚く可き事ありアイヌの村落の近邊に古昔穴居人の遺蹟なる穴あり其近傍のアイヌは其穴居の遺蹟なることを知らず只自然に存在せしものと思ひ之に關して何の思考を爲さゝるあり

第四章　アイヌ人口減少の近因

アイヌの首府同族の戰爭網走に於る不意の出來事食物の變化氣力の喪失衞生及醫療智識の缺乏

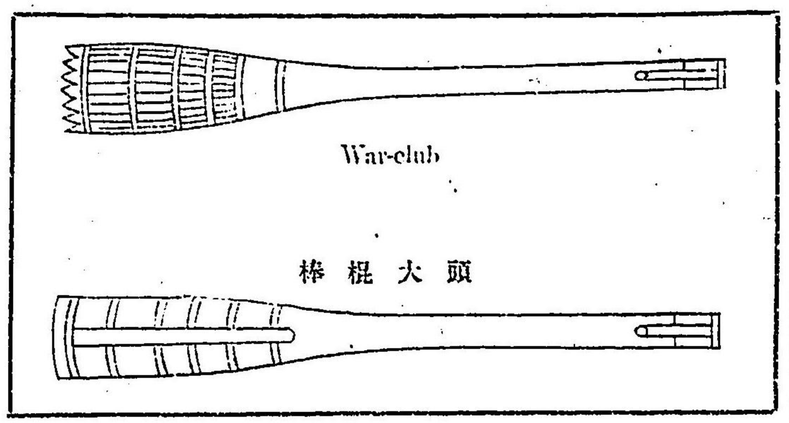
或アイヌの口傳に依れば彼の祖先日本の本土より追拂はれし時平取を以て首府とせり是れ沙流噴火灣及新冠に居るアイヌの說なり然れども石狩に住む者は石狩を以て首府とし北方の者は網走を首府とし東北の住人はアスルコタンを以て首府とし事實に於ては數多の首府ありと信ず恐くは種々の動植物を以て神としたる各種の宗族ありしならん平取は實に南蝦夷の重要なる場所の一にして此場所即此都府の酋長は特別の威力を有して殊に尊敬せられ其命令は必らず絕對に

服從せらるものなり事ある時には毎に必らず豫じめ相談を受け戰時には指揮官の職を執るを例とすと云ふ

扨アイヌの人口減少の原因は彼等の各地の宗族間に生せし戰爭あり人の弓矢又は石、棍棒を以て戰ふことあり今アイヌが彼等の寶物として所藏する古代の刀劍は總て日本人の製作せしものにして彼等は刀劍を日本人の佩用せし如く帶に挿まず肩より懸けて使用せしは奇なり鎗も亦日本人の製作せしものなる故アイヌの創造せしものと云ふこと能はざるなり

著者はアイヌ古代の戰具なる頭大棍をアイヌ器具類中に所藏せり此

棍棒はヲンコの木にて造り長凡二尺にして甚だ强堅なり重量凡一磅以下にて握手の周圍三吋其頭は七吋半前部は其面六吋に刻凹を着け後部は長七吋の穴を造り深は一吋四分の三にして石又は或他の重量の物を入れ此棍棒の重量を增す用に供せり其使用は熟練したるものにて甚だ恐しきものなりと思ふ



アイヌが戰爭する時は戰爭に堪へ得る健康の男子又は女子悉く皆戰場に向はざるべからず常に定式の兵隊を備へざるに依り各人皆其職分を盡して戰はざるべからず村落の酋長又は副酋長は戰爭の場合に

は自から首領の職務を執れり而して男子は男子と戰ひ女子は女子と戰ふ習慣あり此の如くなるを以てアイヌ婦人は亞非利加の女勇士の如き狀態あり

又アイヌは相互にトパットツミ Topat-tumi. 即夜間强盜を爲すこと屢々あり此場合には男子は殆んど睡眠中に於て殺害せられ婦人小兒等は拐帶せられ奴隷とし田圃に勞働せしむ之をウッシュチグルと稱す然れども婦人の或者は妾とせられ夜間强盜を爲す時は大抵伴ひ行き甚だ有益の勞役を爲さしむと云ふ

抑今茲に記述せんとする小なる不意の出來事あり著者自からが其目的物なりしを以て恐らくは其憎むべきアイヌの事實を最明瞭に記す便あり然れども著者は唯觀察者たるの目的を以て之を繰反すべし著者は此最も從順なる種族の或者に侮辱せられたる事と又自から侮辱

（第三圖寫眞業淺田氏）

MALE DESCENDANT OF AN AINU AND JAPANESE.

子男の種雜

せらるゝを望みし事を記すべし蝦夷の北端に網走と稱する所あり著者は常に村落を訪問の習慣あり而して此地のアイヌの酋長を往訪せんとて彼處に行きしに恰も彼は其小屋の外に居たり彼と對面するや否著者は余はアイヌの言語口傳を學ぶ爲め久しく居りたる沙流アイヌの方より來りしことを說明し且若し親切に網走の口傳を余に告げ知すならば余は其代に沙流にて聽きたる口傳を告げ知らすべしと語りたり然るに網走沙流兩地方のアイヌは多年の間不和なりしが余は少しも其事を知らず又余は彼の敵中には客として一時寓せし者なることを語らざりしが故此老人は大に憤怒し余に語りて曰く「網走アイヌはヲックカイ Okkai. なり(即男子なりとの義)沙流の女子マットチップ (Matnep) の如き奴等より網走の我等は沙流の貴樣から何にも聞ない男子にして女子から物を學ぶものがあるか」と云つゝ荒々しく地上に唾

獵すると時は牢獄に拘禁し又は罰金に處し斷せらるゝことあり熊も亦漸次

一萬六千人に上らず古來アイヌの食物は魚類肉類にして就中鹿肉を第一等として食せり然れども數年前に鹿を獵獲するを嚴禁し若し鹿を

又アイヌ人口減少の一原因は蝦夷地に數多の和人移住し國法の改變あり國法の爲に食物を變易せざる可からざるに至りしに由る

赤髭アイヌは沙流の山奥から來た者だと云ひし言を聞きたれば

たりと思はる何となれば余他の所に在りし時或アイヌ者を指し彼を輕蔑するの外他あらずと思ひ居たり此の出來事は遠く迄傳へられ

無禮にも余を見棄てゝ去れり是に由つて余は沙流アイヌは唯婦人として考へられ網走アイヌは男子として比較せられ全く沙流アイヌ

A GROUP OF YOUNG AINU MEN AND WOMEN (CHRISTIAN)

基督教信者男女の集

（青山學院眞業部印行）

次減少せしがアイヌは家畜を飼育することを知らざる故偶馬の負傷して死するか亦は病に罹りて死するに非ざれば馬肉と雖之を食することを能はず亦鱒或は鮭に至りては或アイヌの如きは殆んど之を食ふ能はざる者あり河川の漁場は總て日本人の所有に屬しアイヌは河川にて鱒鮭を捕漁する能はざる如く保護せらる故にアイヌ古昔祖先の食せし食物を食ふことを能はずして現今は野菜類のみを常食とするに至れり此の如き食物の變化はアイヌ人の身体組織に適合せず此の原因に由りても亦人口の減少を生せりと思考せり

尚一の原因は氣力薄弱にして男女を問はず皆其腕力と企望を失ひしが如し彼等は一の人種として他の人間の如くに價値なしと思へるが如し沙流地方を除く外出産より死亡多く亦或所に於ては女子より男子多し實に或アイヌに經驗ある醫師の說の如く此人種は老朽せるな

り

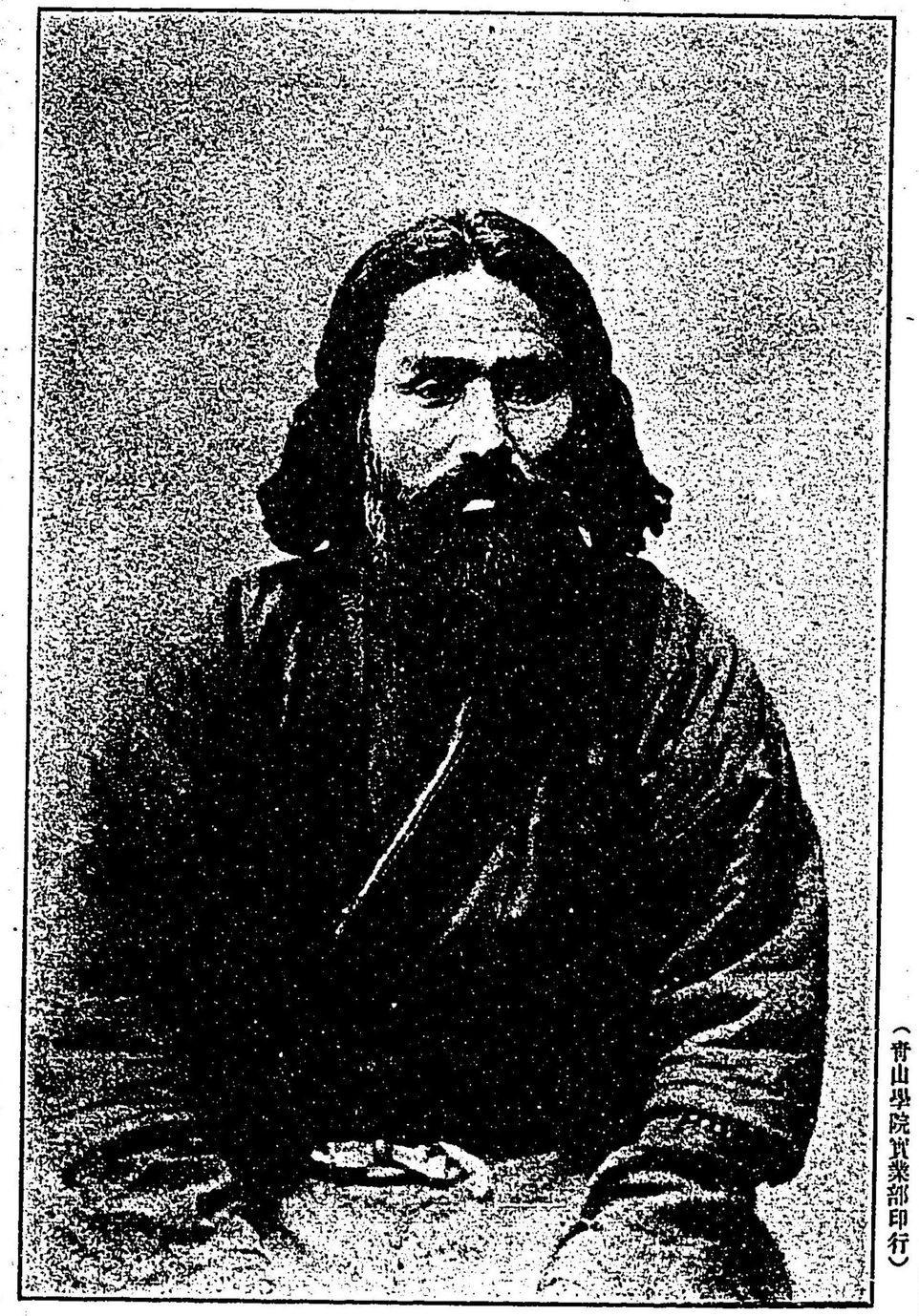
尙亦一の原因は衛生と醫藥の智識に乏しく天氣に障害せらるゝことあり亦彼等は清潔の價値を知らずアイヌの小屋には病人を靜養すべき場處なく小屋の中は暗黑なる荒屋にして煤煙多く蚤虱等の虫類多く壁又は椅子の如き坐席の具なく衣服も亦雨雪を凌ぎ寒冷を防ぐに適せず人若し病む時は臥さして布片を冠らしめ草を煎じ或は鹿の骨角又は鳥嘴を煎じて內服せしめ只死を待つのみに過ず遠隔の地には和人の醫師おきにあらざれども藥價を辨する能はず亦醫師を迎ふに馬を以てする能はざるに依り之を招くこと能はず故に病に罹れば多くは死亡し人口漸次に減少せり

尙亦他に一原因あり强き飲料を嗜好すること是なり或賢き醫師の話に依れば日本酒は外國のウイスケ亦はブランデイの如く有害ならん

と思ふ而して飲酒は直接の害毒は勿論其間接の害惡を免かれ難し何となれば衣食の需用に必要缺く可からざる資金を以て飲酒の快樂に耽るを以てなり亦アイヌは大概皆酒、ビール、葡萄酒ブランデイ、ウイスケ、燒酎等あれば必らず之を飲み或アイヌの如きは純粹の燒酎を飲むを好めり悲哉今は婦女子も亦漸く飲酒する傾あるに至れり著者曾てアイヌ語を學ぶ爲め一人のアイヌを函館に伴ひ行き其飲酒せしめさることに盡力したり然るに彼は飲酒の惡魔の强き力に打勝つこと能はず遂に躓き倒れたり余寐て臥床に在る時夜に乘して窃に窓より出て酒を購ひ又は日暮て後他人をして窃に窓より酒を入れしめしと屢ありたり或日余は彼の呼吸を試みしに酒氣紛々たるを覺へたり故に其室內を搜索せしに床板の下に確に一瓶の燒酎あるを認めたりアイヌの飲酒の嗜好は其甚しきこと概ね此の如し是れ飲酒はアイヌ

人口減少の原因の一とせざる可からず余輩はアルコールの心身共に有害にして又其害毒は子孫に遺傳するを恐る今又一の原因は年々和人とアイヌの結婚是れありアイヌの婦女多く は開化せし日本人の妻妾とならば安樂なりと思ひ喜べり何とあれば左程勵みて勞働せず甘美なる衣食を得ればなり而して或人の話に依れば雜種の生兒は身体孱弱にして大概二三代の後には滅絶し又雜種人は早く禿頭になると云ふ

尙又一の原因は親族相互の結婚あり數年前の事なるが一村に居住せし人皆同血統の親族にしてウイリワック Uiriwak 即同血族なりしが他村に居住せしウイリタク Uiritak 即他村在住の同血族は寡少なりと云ふ此の如く同族の結婚を爲せば長壽を保たず又体力智力强壯なること能はず此道理は一般普通にして其主意は萬民の認むる所なり故に



（青山學院實業部印行）

A PURE AINU.

純粹のアイヌ

古來此の如く同族相婚するを見れば後世に至り此人種の滅絶を以て異とせざるべしランドル氏 Landor は其著書の二百九十五頁に於て曰く「甚だ少にして僅か一二戸ある村落に於ては父親は其娘を妻とすることあり」と云ふ此説は蓋し虚妄なるべし此の如き結婚はアイヌ中に於ても亦曾て無く且此の如き結婚は何人も許さゞればなり

第五章　世界の創造

世界創造の概念。世界創造に於ける鵜鴒の補助。蝦夷の創造。谷地の惡魔の本原。惡の木アカダモの事。

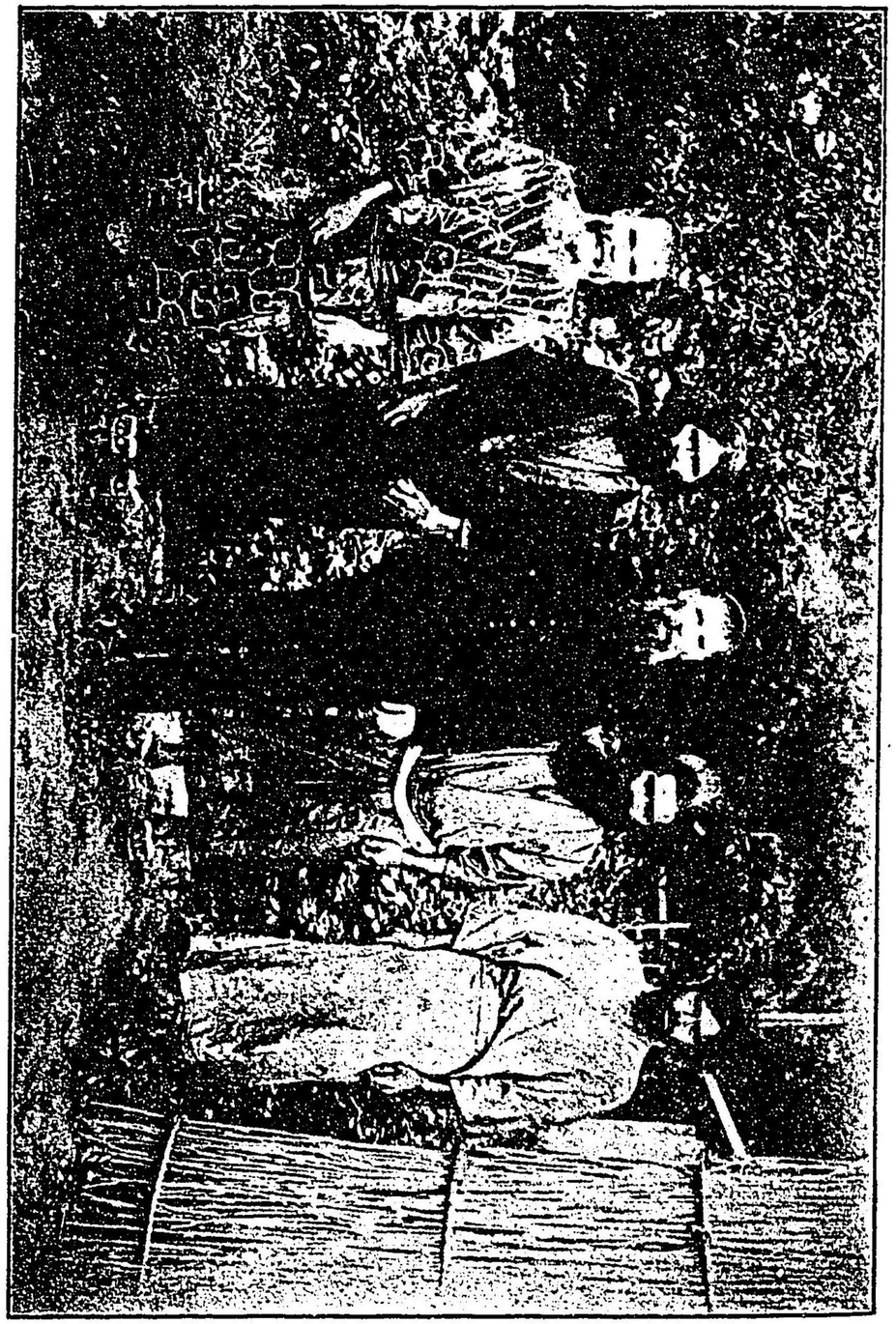
アイヌは世界の開闢に關して確乎たる事實を知り能はざるは眞なるべし然れども世界の本源組織管理に就いて推度する所甚だ多し而して其多くは蒙昧を免かれず若し人神の啓示を享受せず文學を修習せず科學を研鑽せず他國民と交際せずんば此等人民の蒙昧にして智力萎縮し想像空漠に陷りて其心意智慧判斷力の濫妄無稽なるは本書に因りて見らるべし

アイヌは萬物の創造を無より造られしものなることを思はず又此の

如き概念毫もアイヌの心中に存せざるなり神は無より物を造らんと欲すれば無より造り得るなり神は全能にして能はざる所なきが故なり能はずとは人間に對して云ふ語にして神に對して云ふべき語にあらず世界の最初即未だ時間のあらざる以前に實質ありたり而して時間生じて後神自己の意思に從ひ天地を創造せりとアイヌは思考せり故にアイヌは靈と質とは無始のものなりと信せり本原の元素あればアイヌは想像して總ての有機物又は目を以て見得る無機物の顯象を說明せり彼は天然幼稚なる者にして唯目を以て見得る所の物のみに就き理論するを好み甚だ驚く可き想像力を有し其判斷力を傷なへり其思想は植物生命動物生命靈生命等に差別なきにあらざれども其區分甚だ明かならず假令へば樹木の生命、蛇の生命、人間の生命、惡鬼の生命、神の使者の生命及神等の間其差別あること殆んど無し數多の物は

進化して成長すべしとアイヌは深く信せり或物は神に、或物はアイヌの祖先なるアイオイナカムイに或物は惡魔に進化せるなりと信ず假令ば神は世界を造り惡魔は鼠を造りアイオイナカムイは蛇と他の物を造りしなりとす或口傳に依れば或鹿は天より投棄てられたる犬骨より進化し又或鹿は毛より進化す兎は極樂の鹿の皮より抜きたる毛の進化し栗鼠はアイオイナカムイの投棄てたる草鞋より進化し或魚は鱗より或魚は骨より進化せり云々又或花即福壽草は不孝の故を以て神と土龍の呪に因り進化せし女神なりと云ふ蛙は不義を行ひし女の進化し鰐は或魚の腸の進化せしものなりと云ふ

抑物の本原と創造とに關することを記述するには必らず先づ此世界に在りし者を論じたる後にあらざれば世界の事を考ふ可からず而して此の如き順序に依りアイヌを視察するにアイヌは既に全能なる神



（寺田寅彦氏蒐集品）

の存在せることを認知せざる可らず其神は此世界と他の萬有中特に人間の事を顧念し何事を爲すにも必らず守護者として多く種々の位ある使者を送らるゝと思ふことも認知せざる可からず眞の神は唯一位なりと雖唯一人のみにあらず、して其眞の神は萬軍の主たるものなりと云ふ

世界の創造

アイヌの遺傳に依れば神か世界を創造せらるゝに當り其助手として一羽の鵜鴒を呼出し給へり下に記せる所は其遺傳に係る説話ありとす元始には此世界は大なる谷地なり水陸混沌として四方八面何れを見るも只廣大の谷地なる海の如きものなり總て土は漂盪として無涯の水面に浮びたり風物皆寂寥靜穩沈冥ならざるはなく此谷地は空寂にして生命を有する者其中に存せず又大空にも飛ぶ鳥類なく何處も

皆寂寞たる荒野なりし然れども雲には雷の惡鬼あり天には生物あり造物主は其部下の數多の神と共に最高の天に在せり而して後に至り大なる神即眞の神は生物をして世界に生存するを得せしむる爲めに谷地の準備を爲さんと決せられたり此故に彼は鶺鴒を造りて天より降し世界の設備を命せられたり此鳥降りて萬物の混沌せる狀態を見て甚だ驚き其の爲すべき業務を遂ぐること甚だ難しと思ひ心配せり然れども彼は深く考へ水上に兩翼を伸し羽搏きしたり或は足を以て谷地の盤面を踏みたり或は尾羽を以て其上を打ちたりしが暫時の後乾土は陸となり水は海となりたり此の如くにして世界は漸く水の中より屹立し海上に浮び出づるに至れり故にアイヌ語にて世界をモシリ Moshiri と云ふ即浮ぶ地と云ふ義なり而して鶺鴒は此の如き神の使命を盡したる故に甚だ貴重の鳥なり」と云ふ。

上述の口傳を詳かに研究すれば恐くは殆んど耶蘇教の舊約聖書創世記第一章を見たるが如し何となれば其第一章に曰く(元始に神天地を創造たまへり地は定形なく曠空くして黑暗淵の面にあり神の靈水の面を覆たりき)と然れども此口傳は甚だ能く總てアイヌの口傳の性質を具有し又能くアイヌの說話に適合するを以て必らずしも聖書を附會して故造せし遺傳にあらざるべしと思へり。

開闢に於ける鶺鴒より外の口傳

鶺鴒の働に於ける口傳の外に尙口傳あり曰く「元始に神世界を創造せんと決定し給ひし時神己れを助けしめんが爲め一羽の鶺鴒を天より降し神は先大鉞と鍬を以て荒き地を開き鶺鴒其上に飛ひ降りて地を搔均し翼を羽搏きしたり尾羽を搖りて地を平坦にせり故に今日も尙鶺鴒を見れば必らず其尾羽を以て土を衝きつゝあるなり」と

此の口傳の意味を了解する爲めには造物主が此世界を造り給ひし有樣を知らざるべからず造物主は此世界を造くるに大なる石槌と大鉞と鍬とを以てせり何となれば神と雖機具なくして業を成す能はざるを以て鍬を以て地を掘鑿し大鉞を以て物を割截し石槌を以て打擊し鵜鴿其上に飛び來りて之を平坦にせしなりと

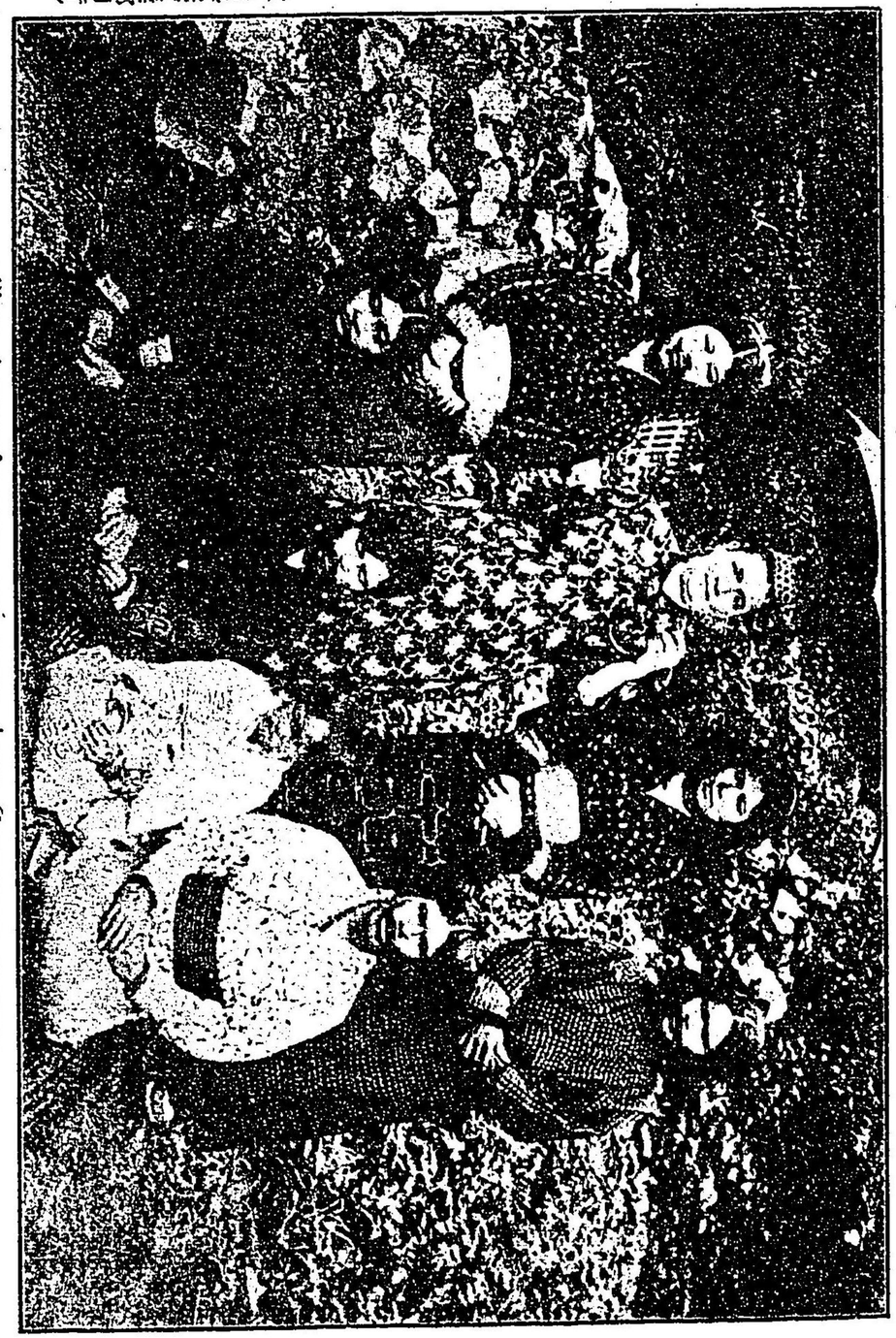
此蝦夷地は神自から之を創造し給はず他の從屬の諸神をして創造せしめられたりと或アイヌは云へり著者は或日田舍より海岸迄或アイヌと共に歩行せしことあり蝦夷の西海岸は何故に此の如く險惡なる荒野なるかと論じ余は此の如くに荒野と爲さず今少し平坦の地とせば可なりしからんと云ひしに居りしアイヌ余を叱りて曰く汝は此地に關し彼是非難すべきものにあらず此は神に造られしものなればなりと而して此問題に就き說話あり曰く

「蝦夷島は三位の神の創造し給ひしものにして其神の一位は男一位は女にて皆造物主の使者なりと云ふ而して女神は西海岸を造り男神は南又は東海岸を造くることゝし相競ふて其成功を爭ひ給ひたり女神は少しく創造の業に就くや偶然アイオイナカムイの妹に逢ひ給ひ自己の務を打忘れ女の習慣として喋々相語り給ひしが多くの時間を費したり男神は之に反し絶間なく務を行ひ給ひたるに由り自分の負擔せられし部分は最早成功せり女神目を擧げ之を見て頗る驚き怖れ早く成功せんと欲し速に働きて粗畧に仕事せられたり故に蝦夷地の西海岸は荒くして粗惡なり若し誰にても蝦夷西海岸の粗惡にして危難多きことを非難せんと欲する者は之を記臆すべし其此の如きは造物主の過失にはあらず其使者の過失にして全く女神の喋々多言なるに由るなり」と

著者はアイヌが屢喋々此事を談ずるを聞きたり而して終に一言云はん唇を閉て其職務を盡すべし然らざれば蝦夷西海岸の如く粗惡を見るに至るべし多言は實に女神の過なり

蝦夷地を創造するに使用せし機具に關して室蘭に近き所にムカラソMukarusoと云へる岬あり即大鉞岩の義なり或人の云へるは此岩は神の使用せられたる大鉞なるか世界を創造し給ひし後之を其儘打棄て置かれしなり何となれば甚だ大にして容易に之を動かす能はざるが故なり此岩は能く細かに視察すれば大鉞の形跡なきにあらざるを以て神の使用せられしありとの想像生せしも無理なることにあらず其形は現今の大鉞の形には能く似ざるも恐くは昔の大鉞と今の大鉞とは其形に相違ありしならん

鉞の惡鬼に變化せし事



（井山信隆撮影）

THE AUTHOR'S WIFE AND SOME AINU CHRISTIAN WOMEN.

女の人 著者の妻 ゑ

アイヌの口傳に依れば此世界を成形するに造物主は凡六十個の鍬を使用せられ其創造の成功せし後は機具は之を打棄て置かれしが後に至り漸く腐朽せり而して或者は惡鬼となり或者は惡水となり或者は種々の病を生ずる樹木となり其惡鬼の首をニタッウナラベ Nitat una rabe. と稱す即谷地の伯母の義なり其名の如く谷地に存在せり。多くの人々は總て惡鬼は其子孫なりと思へり而して其名をトイ〜クンラ Toihekunra. と稱す以下記載する所は其者に關する遺傳なりとす

トイヘクンラ即谷地の惡鬼の遺傳

總ての惡しき怪物は谷地の惡鬼の親類なり彼等皆體太く頭大きくして毛髮甚だ粗らく直立す彼等は夜間にあらざれば出でず故に確かに其形を見定むること能はずと雖彼等出現して人に憑着て害を爲す甚だ恐怖すべき惡鬼なり其起源左の如し

「神此世界の創造を終り給ひし後其創造に使用せられし鍬を山間に打棄て置かれしが年數を經て漸く腐朽せり彼は腐朽して怪物と惡鬼に變化せり人々は此惡鬼を見ざる樣避けざる可からず何となれば人若し此惡鬼を一見するや否忽ち憑着る人惡鬼を見ざるも惡鬼人を見れば必らず憑着く此者は只夜間のみ出づる故に夜に入れば誰も家より外出せざるを善とす祖先等の命ずる所も亦同樣なり抑人若し不幸にして偶然此惡鬼と出會ふ時は之を見るや否速に下の如く云はざる可からず「嗚呼惡鬼よ我は暫らく汝を見て相語ることを欲するが今幸に相逢ふことを得たり今格別に云はんと欲する所は是なり世界の極端即甚だ遠き所に於てモシリシンナイサム Moshiri Shinnaisam. と稱する惡鬼あり其者甚だ汝を譏謗して曰く「谷地に住みし甚だ傲りたる惡鬼あり彼油斷すれば我彼に逢ひ打殺すべしと云へり故に汝早く此處を逃

去りては如何彼は甚だ強し汝若し彼に逢はゞ打殺さるべし」と人若し此の如くに逢ひし惡鬼に云はゞ彼之を信じて大に怒り其惡鬼を搜る爲め忽ち其處を去るべし此詞を以て惡鬼を欺き其禍を避ける爲めの手段とす若し此く云はざるときは惡鬼に逢ひし人忽ち倒れて即死すべしと先祖等云へり」と云ふ

アイヌ相互に喧嘩し相互にトイヘクンラ Toihekunra. と云ふ余は上記の口傳を知らざる以前には其意義を解する能はざりしが今人をトイヘクンラ Toihekunra. と罵るは英國人がデーモン Demon. 又はデヴル Devil. と云ひ日本人が馬鹿又は畜生と云ふ意義と同樣なるを知れり

谷地のデーモンに就き今一の遺傳あり下の如し「神世界を創造せんと決定せられし時作工に必要なる石鉞六十個を備へたり而して其作工を終りし後之を山中に打棄て置かれしが漸く腐蝕せり其腐蝕するに

從以赤錆の水となり其赤錆の水谷地の伯母或は谷地の母となりたり其他の惡鬼は谷地の中又は低き野原の中に住みたり彼等と其子孫は悉く兇惡にして人々を病に罹らしめ又は放蕩に爲す等種々の災害を與へたり雷に此のみに止らず彼等は熊に憑着きて狂亂せしめ人又は馬を噬殺すに至らしめ其甚だしきは人心を亂し癲癇の病に罹らしめたり故に彼等の兇暴なる實に恐れて避く可きものなり彼等は夜間のみ歩行し其歩行するや恰も人が樺木の皮を摩擦するが如き音を爲せり」と云ふ

アイヌが日暮れて後谷地多き場所を通行するを嫌ふは不思議なるが如くなれども此の如き場所を恐るゝは自然の人情にして著者の考ふる所に依れば此の怪物は即マラリヤ熱を惡鬼の如くに誤想せしものならんと思ふ何となれば總て病に犯さるゝは皆惡鬼に憑著かれたり

（青山學院實業部印行）

SICK AINU IN THE "AINU REST" AT SAPPORO.

札幌病舍に居る病人

とすればなり

世界の創造に使用せし大鉞と鍬とは悉く惡鬼に變化せしにはあらずして或者は惡を生出する樹木と爲りしと云ふ此の如く惡の本原に關して余は二の話を聞きたり一は惡を知るの木直接に天より降り來れり而して他の說は所謂大鉞より變化せしものなりと云ふアイヌの此兩說に就き學者の思考する所に依れば今上に述べし後說は實に正統派に屬せりと云ふ

惡木

アイヌの遺傳に依れば谷地ハンノキ(ニタ、ケヲ ニ)即アーナスジャポネカ Nitat kene ni,i. e. alnus japonica は最初に造られし木なりと而して或人余に云ふに曾て著者より聖書にて聽きたる如く此木は蓋し善惡を知る木と同じからんと云へり余輩の考ふるが如く或は造られ或は地よ

り生せしものにあらずして最早既に大木となりし後天より降りてウエンピポック Wenpipok と云ふ所に植へたりと云ふ此木實に惡の源なり即此世界に惡を携へ來りし木なり所謂此惡は無形の惡にあらずして有形の惡なり即身体に苦痛を與ふる惡にして道德に關する惡にあらず惡を爲すは其木の皮にして其實にあらず或アイヌは此木の皮は格別にシハパプ Shihapapu と稱する病を生せりと思へり此病は腹痛甚だしく人を殺すと云ふ此木漸次老ひて皮地に落ち腐朽して粉碎し風の爲め地上に吹散されたり神秘にして其理は解する能はざるも其粉碎は人身に入り腹内各種の病とあると云ふ殊に驚く可きは此木の皮病の源となるのみならず或は藥となることあり新鮮なる此木の皮を採りて湯に煎じて病人に内服せしむるときは種々の病の妙藥ありとアイヌは云へり

扨此の谷地ハンノキ天より降らす所謂大鉞と鍬より變化して生長したりと云はゞ是即前に云ふ第二の話なり故に此處に其口傳を記述すべき場合にあらず

楡木

アイヌは孰れの木が最初に造られしものかと云ふ問題に就ては悉く皆同説にあらず此説には種々の派あり或人の説には谷地ハンノキ最初に造られしと雖他の説には楡最初に造られたりと云ふ善き議論を以て之が証據を擧ぐるものなしと雖其論を擧ぐれは左の如し

一病よりも人は先に存せしものなり何となれば病の寓るべき人間あらずんば病の存すべき所あければなり

二病よりも健康なることは、自然として先きに存するものなり而して健康は人間の普通の有樣なればなり

三 健康の爲めには食物と衣服なかる可からざるものあり食物を用意するには飯を焚くことも要用なり

四 而して飯を焚くには火なかる可らず而して火を焚くに先ち火を造くる道具を必要とす

五 然り而して外國人にてマッチ或は附木を携へ來らざりし以前或は木の根を摩擦し或は石を打ち火を造らす又衣服の反物滿州或は日本人より持來らさる以前は木皮を以て衣服を造くることあり

六 扨火を生せし木の根は楡なりしを以て衣服を造りし皮も楡なり

（而して今の賢き議論家の決斷をも考ふべし）

楡の根は火を造くるに要用にして又其皮は衣服の爲めにも必要なり

爨炊の火にも要用なり而して彼等に適當なる火を焚くことも要用な

り人の最初の狀態は健全にして健かある身体を有し衣食必需なり故に固より火もあり衣服もあり此二者を造くるに楡の根と皮とを要する故に神の最初に造り給ひしは楡と火との二ありしを以て楡は谷地ハンノキより前に造られたりと云ふは確論なるべし

最初に造られしは楡にあらずして谷地ハンノキなりと云ふ説を信する人の論には火は最初天より下し賜ひしものなりと云へり然れども電の外に天より火の下りしことを見し人あらず又電は甚だ必需にして人の嗜好に適するものにあらざる故前説の如く有力ならず故に前説を信ずる人多し此の如き説に關しては多くの議論あれども余輩はアイヌ人中未だ無神論者に逢はざるなり。

上來記載する所に就き一事の注意を讀者に望む即アイヌの祖先等は火又は火を造る機具の未だあらざりし時代あるを思考せざること是

なり是れ皆總て他の野蠻人と同樣なり如何に大古の人種と雖火を知らざる時代は未だ見へざるありアイヌ人は云へり此世界に於て神の最初に造り給ひし神は楡と火あり而して此思想の根柢には動植物崇拜 Totemism 伏在せるや否は余の今言はざる所なれども後に至りて之を說明すべし

第六章　宇宙學 (イ) 地上地下

世界の形象。世界は魚の上に基礎せらる。干滿潮の原由。海嘯の事。地震の事。タアタラス即地獄の事。地下の極樂。

驚くべき哉アイヌは昔時の日本人及支那人と異り此世界は方なるものにあらず圓きものなりと思惟せり彼等の言ふ所に依れば世界は一の大なる海にして其中に數多の島即世界又は國土あり各地皆格別なる神々に統治せらるゝと之を事實に徵ずるにアイヌ語に宇宙と云へる語あし川又は池に在る小島も大海に在る大島も總て大なる國も亦皆同一の語にて稱せらる其語はモシリ Moshiri と云ふ即浮べる土の意味なり川の小島も海中の國土も池の小嶼も皆此語を以て意味せり此

語は形容詞にして例令へばレプンモシリ Repun Moshiri と云へば即海に在る浮べる土の意味にして島の義なり又シャモン Shamon 或はサモロシリ Samoro Moshiri と云ふは我等の隣に浮ぶ土の意味にして即日本の本國の義なり何故に世界一般を指し圓きものと云ふやと問へばアイヌ答へて云へり大陽は東より出て西に入り翌朝東より出て西に入る故なりと

或日本人の如くに世界は必らず或魚の背上に基礎せられたりとアイヌも思考せり而して此魚の名をモシリ、イッケヱチェブ Moshiri Ikkene chep と云ひ世界の背骨なる魚の義にして此魚の搖動するときは自然に地震ありと云ふ以下に記載せし說話は此事を解き明すものなり

干滿潮の口傳

「神が此世界を創造し給はざる以前は廣漠たる谷地の外何ものも見る

能はざりき然るに其中に大なる魚あり甚だ巨大にして其頭は一の端にあり尾は他の端に至る抑造物主が此世界を創造し給ひし時此魚を以て基礎とし造られ此魚は世界の下にありて其口を開き水を呑吐し水を呑む時は干潮となり水を吐く時は滿潮となるなりと云ふ其口傳此の如く著者之を聞き以前聞きたる口傳を思出せり其口傳左の如し」

「沙流川の源に大なる池あり大古其池中に大なる魚あり一の端にて鰭を動かし他の端にて尾を搖る此時我等の敬ふ可き祖先等は此魚を殺さん爲め池に行きしが久しきを經るも之を殺すこと能はず彼等此魚を殺さん手術に困しみしが神は格別に蝦夷地を守護せらるゝを以て天より助を與へ給ひ神降りて其爪を以て此魚を捕へ給へり魚は一生懸命に水底に沈まんとしたれども神は力を盡して之を水面に引上げ陸地へ捕へ來り給はんとす此時我等の敬ふ可き祖先等は刀を拔き死

に至る迄之を斬りたり古人の話に依れば此大魚水を飲みつゝ池の岸邊に來ること屢ありしが其池の邊に居らば鹿又は熊を呑のみならず男女を問はず人間をも呑みたり其甚しきは舟一杯に乘り居る衆多の人々を舟と共に呑みしことあり此故に昔の祖先等は此大魚を殺さんと欲せしものなり」と云ふ

アイヌは格別に大なる池を恐怖せる者の如し何となれば大なる池に
ば不意に大なる魚類躍り出でゝ畜類及人類と雖之を呑むこと屢ある
が故なり仮令ば數百年以前に此の如く大なる魚の死してシコツトと
云ふ池の岸に見へたることあり其魚の腹を割き見しに大なる角ある
鹿居りたり其角堅く此魚呑みて之を消化する能はずして遂に自から
死せしものあるが其角は魚の骨を貫き出て露はれ居りし」と云ふ

海嘯と地震の遺傳

「凡て海嘯の原因は此世界の下に在る魚より起る此魚は水を呑むこと
頗る多量あるが又口を開き瞬間に烈しく吐出すことあり其吐出す時
即是海嘯とあり又此魚の身體を搖動する時は地震となる其靜に動く
時は小地震なれども若し怒りて強く動く時は大地震となるなり此魚
は甚だ恐るべきものなるが故に造物主は二位の神を遣はし一位は左
に一位は右に立たせ給ひて此魚の搖動せざる樣に守護せらる此二神
は必らず常に各隻手を以て此魚の搖動せざる樣に壓止し飲食の時と
雖必らず隻手を放し給はず海嘯と地震の原因は此の如くある故に必
らず小兒等隻手を以て食物を食ふは失禮なることゝす小兒が隻手を
以て食物を食ふを老人等の見るときは彼に向ひ曰くモシリイケウエ
チヤプ Moshiri ikkewe chep の傍に立ち給ふ神樣は隻手を以て食事するを
許されあるが汝等は其神樣か」と戒むると云ふ

ターアタラス Tartarus 即地獄

宇宙の事を論せんとせばアイヌは必らずターアタラス即地獄の事を論ずるを忘れず故に地獄の問題は必らず鬼神論 Mythology の内に包含せらる然れどもアイヌの所謂ターアタラスは古昔希臘國のホーマーのターアタラスと異なる所ありホーマーのイリヤットと云ふ書を讀ばターアタラスは深き暗國にして天は地よりも遠く隔りヘデス Hades と稱する陰府よりも尚ほ深き所に在り其入口には鐵門あり又ジュスなる神に謀反せし神此處に放棄せられたりと云ふホーマーより遙か後世の著述者等は此處を煉獄の如きものとし惡人の靈魂其處にて罰せらると云ひ又後世の詩人はターアタラスはヘデイスの類なりと云へり余輩は及ぶ限りアイヌの古昔の口傳を搜り又今のアイヌの說明を聞しがアイヌはターアタラスを以て必らず人々の靈魂の往所なり

と云ふにあらずアイヌ語に依ればヘデイス Hades を稱してポクナモシリ Pokna moshiri と云ふ即地下の獄の義なり又ターアタラスを以て人間の罰せらるゲヘナ Gehena を指し云ふにあらず之を稱してニッテチカムイモシリ Nitne Kamui moshiri 又はテイチポックナモシリ Teine pokna moshiri と云ふ此二語は即惡魔の國又は地下の濕ひたる國と云ふ義なり蓋しアイヌの思ふに如何なる場合に於てもターアタラスは人間の在住する場所にあらず其處は此世界の極端なりとせり基督教の聖書中にはタアタロー Tartaröo なる語唯一たび見ゆるのみ而して天に於て罪を犯せし神の使者天より放逐せられてターアタラスの暗き穴に幽閉せらるゝ所なり故に聖書のターアタラスは希臘のイリヤットのターアタラスとは少しく似たる所あるもアイヌのターアタラスとは大に異なるなり

然るにアイヌの所謂ターアタラスは昔希臘人又は聖書に云ふ所のターアタラスと相異なる事多しと雖或場合には同樣の所ありターアタラスは總て造られし世界の終端に在りと云ひ又我等の存在する此世界の下に尙六の世界ありて其最下に在る世界をチラマモシリ Chirama moshiri と云ふ即最下の世界と云ふ義なり余輩思ふにホーマーの所謂ターアタラスと符合せり此處の性質はアイヌの考ふ所に依れば必らずしも暗黑なる所にあらず頗る美麗なる國にして此世界の如く輝々たる光線に滿つ此處は罪を犯せし天使の牢獄或は神人及惡鬼の居る所と思はず且有生の物あしと云ふ大古雷の惡鬼此世界に於て或時大なる戰を爲せしが此世界は甚だ狹く脆きに依り天に登りて戰を爲すことふせり天に在す神之を憂ひ給ひ命じて惡鬼をチラマモシリと云へるターアタラスに移さしめられしが雷の惡鬼は終に此處に於て殺

されたり神又は惡鬼の靈魂も亦不消不滅のものあるが故に惡鬼の靈魂は此處より上りて下に在る天の雲の中に入りたりと云ふ是即ターアタラスに關するアイヌの口傳なり頗る曖昧なる口傳なれども尙口傳として殘れり然るに此世界の下に六の世界ありと云ふ說に反對の口傳あり此二の相互に反對せる口傳を如何にして調和することを得るや未だ其說明を聞かざるが故に著者は之を知らずと雖其反對の口傳は左の如し

「人間の住む此場所に三の名あり其一をカンナモシリ Kanna moshiri と云て即上なる世界の義なり其二をウエカリウヲテレケモシリ Uwekari uoterekе moshiri と云ふ即人々相互に足を踏み合ふ世界の義なり其三をウアレモシリ Uare moshiri と云ふ即相互に繁殖する世界の義なり今此世界に於て人間の足の下に尙別の世界あるを以て此世界を上なる世

界と云ふ又其下に在る世界は甚だ卑濕の所にして惡人の死せし時此處に送られ罰せらる其世界に接近して他に別世界あり其名をカムイモシリ Kamui moshiri と云ふ即神界の義にして極樂の意味あり善人の靈魂は此處に往き諸の神と共に逆に歩行す故に彼等の足趾と此世界に居る我等の足趾とは相互に踏合ふなり而して此世界の晝は極樂の夜にして極樂の夜は此世界の晝なり此世界の夜なる時は髮を切り又は鬚を剃るべからず何とあれば夜は神及人の靈此世界にて働き居るを以てなり夜間に人々働かば必らず罰せられて疾病と早死を免かれず」と云ふ

此口傳に依ればアイヌ死するも尙其靈魂は肉体なくして獨り生存し能ふと信ずるが如く見ゆ人死すれば其靈魂はヘデス即地下獄に往き或は罰せられ或は葬らるゝか故なり或アイヌ著者に向ひ夢にて死せ

し酋長の靈魂現はれ彼の話せし事を夢みたりと語りたり其夢は左の如くなり

(酋長の靈魂來り曰く我に聞けよ我は某の酋長の靈魂にして地下獄に存在す此世界を去りて地下獄に往き今に至る迄罰せらる嗚呼哀哉今我罰を受くるは我自からの罪にあらずして我の世界に在りし時我部下に屬し我の支配せし人民の罪の爲に我は今罰を受けたり我世界に在りし時尙善く正しく我部下の人民を支配すべき筈なりしを以てなり今より地上に在る總ての人は皆其惡を悔改むべし然せずんば彼等も亦此處へ送られ罰を受くべければなり)と

此夢を著者に語りし人又曰く(人若し惡しき夢を見ば必らず其村の老人等を招き之を話し聞かし其惡を除く樣にイナヲを造らせ祈を爲さしむべし)と云へり

第七章　宇宙學（ロ）蒼穹

天の限涯。天に就て有形語の使用。日月及其口傳。月眾に住する人。日と烏。星と銀河。天より生物の降りし事。

ターアタラスと云ふ所は此世界の最下の端に在りと思ふと同じく天の下にも亦一の端ありと思へり第六章の終に雷の惡鬼チラマモシリにて殺され下に在る天の雲の中に入れりと云ひしが此所は即蒼穹の端なりと云ふ或アイヌは我等の上に在る天の數は六ありと雖余輩は今に至る迄唯六あることを聞きしのみなりしが第一最下の天をランゲカンド Range kando と稱す即擲る天或は弔す天の義なり又或はウラヽカンド Urara kando と稱す即霧の天の義なり第二の天をノーチユオカ

ンド Nochiliu o kando と稱す即星を有する天の義なり最上に在る天をシニッシカンド Shinish kando と稱す即雲高き天の義なり此最上の天の周圍に甚だ廣大にして高き鐵壁あり其入口に鐵門を設くアイヌの祈に屢々カンド鐵門或は閉ぢ或は開きたりと云ふ言を聞けり天は造物主と位高き天使の居所なりと云ふ第二の天即星を有する天は第二の位を有する神の使者の居所にして惡鬼は雲中と此世界に近き空中に住むと云ふ

造物主に最近き下位を有する神は日なる女神なり何となれば此女神は造物主の宇宙に存在する總ての被造物の支配者ありと或人の云へるが故ありアイヌも亦此女神を月の神なりと信せり又或人は月は女神にして日は男神なりと雖他の人は之に反對せり多くの人の說に依れば日を以て女性とするもの〻如し或所に於ては日も月も衆庶の拜

禮すべきものにあらずと雖之に反して他の所に於ては頗る之を崇拜せり

然れども能く之を審に穿鑿すれば日自身は神にあらずして女神の乘物なりと云へるものゝ如し故にアイヌは日を拜むにはあらず日の中に存在して光を與ふる女神を拜むなりと云ふ而して驚く可き哉日月に存在する神は日月の生命なりと云へり故に若し日より女神を取去れば晝間と雖忽にして暗黑となり月より男神を取去れば一點の微けき光も無きに至るなり故に凡て他の未開人種の如くアイヌも亦頗る日蝕月蝕を驚怖せり

千八百八十七年に於て日蝕ありしが著者はアイヌに日蝕の形狀を視せしめんと欲し少さき板硝子を黑くし恰も日の蝕し始めたる時に至り此黑板硝子を以て日を視るべしと命せしが一人は其日の蝕するを

視るや否忽ち叫びてチユプライチユプライ Chup rai chup rai と云へり即日死ぬ日死ぬの義なり又他の一人も亦叫びてチユプチカイアヌ Chup chikai anu と云へり即日氣絶す或は忽ち死ぬの義なり此く云ひし外一語も發せず恐れ戰きて唯驚くべく恐るべしと嘆息のみ爲し居るを見たり然れども彼等の最甚しく恐怖するは日蝕皆既なること論を待たず若し皆既の儘光明再舊に復せざれば日死して總ての生物も亦死すと思ふが故なり

從來何の經驗もあらざれば日蝕の時恐くはアイヌは日を拜むならんと思ふ然るに今之を拜まずして將に死んとし或は氣絶したる人に對して爲す如くに日に向つて爲せり例令へば人の將に死んとする際著者は曾てアイヌの臨終の狀を見たることあり)其傍に在る人水を其口に含み病者の顏面又は胸上に吹き又は器に水を盛り手を以て水を撒

し將に死んとするを呼び活す之と同じく日蝕の時にも人々水を持來りて日に向ひ水を撒し或は吹出しつゝ聲を發しカムイアテンカ、カムイアテンカ Kamui atemka Kamui atemka 即神よ我等汝を生き復す神よ我等汝を生き復すと云ひ柳の枝を以て水を撒す時は格別に復光明を生ずべしと思へり

此の如き仕業にて日を生き復へし再び嘗の如く光を發すれば酒を好む人々相集り必らず酒を買ひて醉ひ日病に罹り氣絶せしが再び生き復せり故に御酒を捧げ之を飲みて祝ふは當然の事なりと思ひ酒を飲みつゝ盛に昔の日蝕月蝕の話を爲す然れども二三杯杯を重ぬれば其話頭遂に荒唐に流れ又遂に信すべからざることゝなれり

日蝕月蝕に關するアイヌの全き口傳は左の如し

我父の小兒なりし時聞きたるが年老たる祖父の話に依れば祖父の祖

父は日蝕の皆既を見たり其時世界は眞暗になり何の影をも見る能はず鳥は樹に宿りて眠り犬は恐れて吼へたり日の暗く死たる周邊より電の如き燄を出し星は輝々として光を露はせり暫らくして後日の漸く生き復り人々相互に顏を見合せば其面貌死人の如く靑ざめ日の生き復るや人間も亦生き復れるなりと見ゆ」とアイヌは全く日蝕月蝕の眞實の原理を知らざるものならん

上述の口傳を聞きたる後又更に今一つ左に記す口傳を聞けり

日と月の口傳

日月は夫婦の神にして其職は天地を支配するものなり男の方なる日は唯晝間のみ働き女の方なる月は唯夜間のみ働く然れども時として相共に天を運り行くを見たり日は燦爛と輝きたる最善き衣服を着るが故能く照る其衣服は白き綿物にして其體は其婦より大なり月は圓

き黍團子の如きものにして其衣服は黑と白とを二枚重ねて着るなり故に人若し能く注意し月を視れば必らず之を見分くることを得べし月は時として其形を隱すことあり是は何故かと云はゞ其夫を訪問するが爲めなりと老人の語る所此の如くなり」

月界に人の住する事

月界に人の住する事に就ての口傳は左の如し

「昔兩親の命を守らず水汲の業さゑも爲ざる一人の男の子あり神之を見て怒り給ひ諸人の戒と爲さん爲め此子を捕へ行きて月の傍に置けり即是月界に住める人なり諸人よ之を聞け兩親の命は善にても惡にても子たる者は必らず從はざる可からざるものゝ多り」と云ふ

此面白き口傳を或人は左の如く說明せり

「此子は水汲を命ぜられたれども懶怠にして爐の邊に坐し小刀を持ち

爐縁を叩きつゝ居りしが暫らくして漸く外へ出て戸の傍の柱を叩きて嗚呼吾悲哉汝は戸の傍の柱なるが故獨り汝は水汲を免かると云ひ又暫らくして桶と柄杓を持ち川に行き下流より登りつゝある小魚を見て彼は此小魚に向ひ嗚呼吾悲哉汝は骨多き動物なれども魚なるが故獨り汝は水汲を免かると云ひしが又暫らくすると一尾の鮭來りしを以て「今日は」アキアヂ樣と云ふや否此魚は彼を掴み諸人を戒むる爲め此子を捕へ去りて月界に置く此子は水を汲むを嫌ひし故神怒りて罰を與へ給ふなり」と云へり

蝦夷の烏の如く惡賢く人を恐れざる烏はなし此烏は屢人家に飛込み人の食しつゝある食物を盜み又は人の背に荷へる魚を盜むことあり余輩は或アイヌと共に此事を談せしが烏は此の如く惡業を爲す烏となるべき由來あり何となれば昔烏は人類の爲め善事を爲せし事ある

が故なりと云へり此事につき其或アイヌの話は左の如し

惡魔日を呑込んと試むる事

神世界を創造し給ふ時惡魔は其目的を妨害するを勉め殊に人間に對する目的を邪魔せんとせり抑萬物創造の後人間は日の光熱あるに非ざれば生存する能はず故に惡魔は志を立て此の如く明美にして必要のものを奪去りて人間に災害を與んと企たり彼は或朝夙に起き旭日の未だ東山に昇らざる前之を呑込んとせり神此企を知り給ひ之を防く爲め一羽の烏を造り給ひたり惡魔は旭日の出る前之を呑んとて口を開きしが待伏し居たる烏惡魔の口に飛入り之を防きたり故に烏は背人類の爲に此の如く大なる功勞を爲せしを記憶し何にても心の儘に人間に向つて惡業を爲し人家に飛入りて人の食物を盜みても可なりと思へり之に由て見れは實に烏の惡業を爲す所以あり我等唯見て

何の益もなき烏なりとする能はざるものなり」と云ふ

此事に關し著者の聞きたる口傳今一あり左の如し

「大古即最初日の出る時惡魔之を呑込んと欲し口を開きしが烏類中に於て其數頗る多き烏群れ來り其喉に飛入たり惡魔大に驚き口より羽毛を吐出せり此間に日昇り昼となりたり此日あるか爲めアイヌは烏獸を獵することを得るなり然らば烏は惡しき烏にして人の食物を盜むと雖彼此非難すへきものにあらす烏は拜むへきものには非らすとも之にイナホを捧くるは當然のことなり」と云へり

此口傳の末段は解し難き所あり即烏は拜むへきものには非らすともイナホを捧げるは當然なりと云ふイナヲを供ふるには拜祈を含めり余輩の見るに各地方に居るアイヌ等は烏を拜むのみならず烏送の爲め籠に育てゝ殺すことあり然れども今此反對說を調和すれば蓋し恐

くは鳥は或地方のアイヌの動物崇拜者の神にして他の地方に於ては其宗族を嫌ひ烏は神として拜すべきものに非らずとせしにはあらざるかと余輩は思へり然るに今日に於ては之を確言することゝ能はず星は拜れずと云ふ外星に就て爲すべき説話なし然れども屢々星をカムイ即神と稱することあり之を神と稱するは唯一の敬語にして天然に在する必要にして美麗なることを指稱する形容詞にして實名詞にあらず諸〻星はアイヌ語にてムンヌエップノーチユイ Munnuyepnoc Iui と云ふ諸の星の義なり彗星の顯はるゝを見る時はアイヌは頗る驚き恐ることゝ甚し何となれば戰亂、流行病、飢饉、死亡等の前兆なりと思へり又天の川はアイヌ語にては曲り川の形と云ふ詞を用ゆ或は神の川と云ふ詞を用ゆることあり諸〻神此川に於て魚を漁り消閑の樂を爲すと思へり

茲に一の驚く可きことありアイヌは此世界に於ける如く天に於ても鳥類獸類魚類の數多種ありと思へり又口傳に依れば最初或生物は天より降りしか如く見ゆ其口傳は左の如し

「此世界の未だ創造せられざる遙か以前天に於て數多の種類の鳥類獸類魚類あり此等の生物は此世界の壯麗にして又山河の明美あるを見て天より降り此世界に來住する冀望を起し神に近き之を請願せしが神許し給ふて曰く汝等人間の在住する世界に降りて住むことを許す何時にてもアイヌ變災、病難に逢ひ飢餓に迫る時は缺く可からざる必需の物を給して之を補養すべし」と彼等此許を蒙り此世界に降り蕃殖せり之に由て見れば鳥類獸類魚類は人間の利益を爲す爲めに降りしものなるが故に之を崇拜祈禱せざる可からず彼等生物に向つて祈を爲す時は必らず冥助を蒙る故にアイヌは之を敬愛して神の如くに崇

拜するなり」と云ふ

然れども讀者若し生物は總て最初より完全なる形体を具へて降りしものなりと思はゞ誤なり何となれば口傳に依れば或ものは天に於て諸〳〵神の饗應の殘屑より進化せうと云ふ其口傳は左の如し

「大古神水陸を創造し給ひたる後極樂の家に歸り給ひ其家に入り給ひしに或隅に二の袋あり一は魚の骨一は鹿の骨を滿せり即是饗應の殘屑なりしが神鹿骨の袋を山に撒き給ひければ忽にして甚だ美しき生ける鹿に化せり又魚骨の袋を河海に投じ給ひければ瞬く間に數多の種類の魚類に變じたり鹿及魚は此の如くにして始めて此世界に生せし故其減少せし時少しく蕃殖せんことを神に祈り求むべし何となれば最初神が造り給ひしものなるが故今日も亦同じく神の力にて蕃殖するものなればなり」と云ふ

下に記載する口傳に依れば或生物の本原は天にあらずして地に在る惡魔即怪物の中より生せしものゝ如し此事は本書に於て屢々記載すれども茲に其一例として左に擧ぐべし

「大古蝦夷の山中に甚だ偉大の怪物あり其形体は人間の如くなれども頗る巨大にして毛多く皮膚は熊の如く額の眞中に一眼を有し其大なること鍋蓋の如し此怪物はアイヌに多くの災害を爲せり甚だ大食にして厭くことを知らず彼に近けば何物にても忽ち掴み殺さる故に獵師深く山奥に入るを恐る何となれば此一眼の怪物に向つて射撃するも其矢少しも傷害を與へざればなり或時弓の名人にて勇豪なるアイヌ不知不識にて此怪物の居る所に行き一疋の獸類を獵せしが豈圖らんや輝々たる光あるもの己れの方に向ひ進み來たるを見たり其は何物かと近寄り見れば恐る可き哉體軀偉大にして毛多く驚く可き怪物

なり彼のアイヌ之を見て一時大に驚き爲す所を知らざりしが忽ち勇氣を出し一矢を番ひ一眼を狙ひ之を射しが怪物倒れたり彼のアイヌ近寄りて熟視すれば狙を誤たず一眼に命中して忽ち死せり其一眼は此怪物の生命の存する炎所なりしが故なり而して害惡を爲す大敵の確かに死して再び蘇るを防ぐ爲め其死屍の上に火を焚き全く之を燒盡し殘灰を取り天に向ひ散布せしが驚く可き哉其灰より蚊、蠅及虻等の如き類に進化せり然れども我等は此等害虫あるを呟くべからず何となれば我等人類の間に人肉をも食ふ此恐る可き怪物の居るよりも寧ろ蚊、蠅、虻の如き害虫の居る方災害少なければなり」と云ふ

第八章　アイヌ及アイヌの名稱を論ず

アイヌの祖先はアイヲイナか？アイヲイナと云ふ語の由來、アイヌの名稱はアイノにあらず、アイヌの多毛なる事

今まで本書中に屢々アイヲイナと云へる名稱ありしが故此語の意味を今本章に於て之を論ずべしアイヲイナと云へる名は重要の者を指稱するなり何となれば或人は彼をアイヌの祖先なりと云ひ又或人は彼をアイヌに始めて宗教と學術と禮式を傳授せし人なりと云ひ又或人は彼を神の代人となりて此世界を造りし者なりと云へばなり此等

の事は多く本書中に論ずる所あるを以て今茲には讀者の了解し易き爲め彼の歴史を記載すれば可なるべし因て先づ神的アイヲイナよりアイヲの出でし事より記すべし

アイヲは神的アイヲイナより出でし子孫なる事

アイヲ人種はアイヲイナカムイより出でしと或アイヲは信せり然れども其出るは通常人間の両親より生出る如くにあらずして彼はアイヲ人種の祖先を造り出せし神なりアイヲの口傳に依れば彼は第一等の神の中に在り高き天より降され人類を造り且各種の器具を造り鳥獸を漁獵し神を崇拜し宗教儀式を敎へんが爲に降りしものにして此事を詳にせる遺傳は左の如し

或人アイヲイナカムイをアイヲラッグル Ainurak guru. と稱す是即アイヲの嗅氣ある人と云ふ義あり其名の由來は下の如し(アイヲイナカ

ムイ天より降り元始のアイヲを造りし後尙此世界に留りて狩獵及生計を其造りし人々に敎へり彼は此世界に在りし間はアイヲの如く飲食衣服し力を盡して爲す可き任務を成し終りたる後天に昇れり其未だ天に昇らざる前早く衣服を脱ぐことを全く忘れ此世界に於て着たる衣服の儘極樂に至りしに諸神鼻を開き匂を臭ぎ顔を蹙め相互に顔を見合せ曰くハテナー・アイヲの嗅あるナー)と云ひ給ひたり其然る所以はアイヲイナカムイは此世界に於て着たる衣服を今天に在ても亦其儘着たるに依り彼には一種の嗅氣ありたり故に彼は直に天より降り衣服を着更へて再び極樂に歸りし)と云ふ

然れども アイヲは多く此事を信せず其名の由來他に在りと云ひ即曰くアイヲの元始の祖先をアイヲイナカムイと稱すアイヲイナは其實名にしてカムイは神と敬稱せし語なりアイヲイナの始の子孫を稱し

てアイヲイナラッグルと云ふ即アイヲイナの嗅氣ある人又はアイヲイナの德ある人と云ふ義なり然れども此語は餘り長き故アイヲイナラッグルを略しアイヌラッグルと稱せしが其後又ラッグルを略してアイヌと稱せしなり今日と雖アイヌをアイヲイナラッグルと稱すればアイヌは甚だ喜べり故にアイヲイナと稱する人の存在せしことあるに相違なしと信ず何となれば多くのアイヌの口傳に於て其名著しく今日に至りてもアイヌは其靈魂を拜すればなり

、アイヲイナと云ふ語の由來大略

前述の由來眞實なりとせばアイヌと云ふ語は甚だ惡し何となればアイヌと云ふ語の義(即人又は人々)を失ふに至るを以てなり故に余輩は之を受納ること能はず、アイヲイナは蓋し最初に敎法を敎へし人にしてアイヲイナラッグルと云ふは口傳を保存し或は口傳に從ふ人と云

ふ義なりと信ずヲイナと云ふ語の第一の意味は昔と云ふ義かり第二の意味は古傳を述ぶる義なりアイヲイナ又はアエヲイナと云ふ語は受方動詞にして傳はれる又は傳はれし口傳を保存する義なり又アイヲイナラッグルと云ふ意味は敎を守る人或は口傳を奉ずる人の義なるが故にアイヲイナカムイはアイヌの口傳を宣傳へる敎師の名なりと余輩は信せり此由來は道理にも自然にも適ひ又壓制する所もなくアイヌと云ふ意味を失はざるなり又茲に考ふ可きことあり即アイヌと云ふ語は人の意味に使用する外他に使用せざるなり又人を意味するにアイヌの外他の語なし

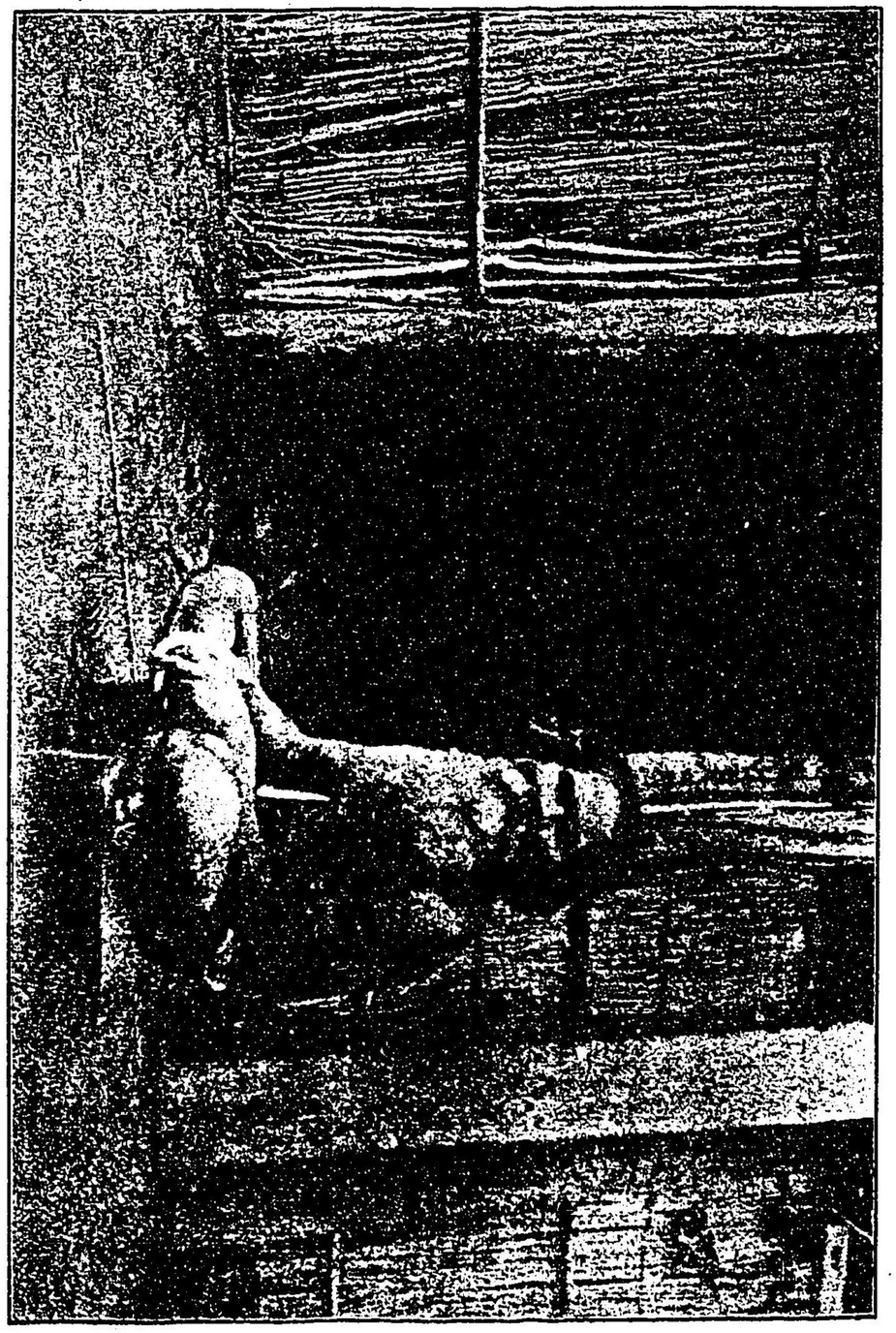
蝦夷の噴火灣の新室蘭に近き所にヲイナウシと云ふ地あり其意味は口傳の場所の義なり或人の話に依れば昔アイヌ等或は獸の皮又は石狩河口より鷲の羽を日本の本島或は松前に持行き交易せざる前に大

概此處に集り共に大海を渡航せり彼等は諸方より此處に集りし時相互に各地の口傳珍事を語り又は樺太韃靼即滿州のあることを話せり故に此地を稱してオイナウシと名けしなりと云ふ

アイヌ人種の名はアイノに非らずしてアイヌなる事

アイヌは必らず己れを稱してアイノと云はずしてアイヌと稱すアイノの名稱は日本人より出でし語にして昔時の日本人彼等を輕蔑する心を此語に顯はすアイヌと云ふ意味は雜種兒即アイノコの義にしてアイヌの女と犬より生出たりと云ふ虛傳あるを以てなり然るに玆に著者の喜ばしき事あり現今日本の諸學者及官の文書はアイノと云はずしてアイヌと稱せり

始て此虛傳を聞く人は之を眞實の口傳なりと信じ犬はアイヌの動物崇拜の神なりと思ひ誤りたる人は恐くは以下の言をなさんカラン人種は



A HAIRY MAN.
アイヌの毛多

ジャワの土人にして其元祖は犬に變化したる姫君と酋長より生出せし者なりと云へる口傳に相似たりと然れども余輩は之に答へて云はん第一アイヌの口傳に依るに犬は此人種の動物崇拜の神なる証據なし第二此虚傳はアイヌの口傳に非らずして日本人の説あり勿論今此笑ふ可き虚傳を以て實に不思議に毛だらけなるアイヌの特性を説明せり何となればアイヌの元祖を犬なりとせば其毛だらけある原因を了解するを得べく又此人種は毛多きには相違なしと雖歐米人中にもアイヌの如く毛多き者數多あるを以てアイヌの毛多きも驚く可きことにあらず其毛の多きと否とは論ずるの要もなきことなり

アイヌの事を著述する人々は必らず其著書を面白くする爲めにアイヌの毛多きを過大に話せりミス、バーアルド又はハウワルド氏の如きも亦皆其毛だらけなることを誇大に説けり蝦夷に來りし外國人又は

アイヌの事を著述する人々は未だアイヌを見ざる以前より其不潔にして多毛の人種なりと聞きて臆想を腦裏に畫けるを以て彼等はアイヌは總て不潔多毛貧賤にして人類よりも寧ろ獸類に近き者と思へり然れども余輩と相共にアイヌ部落に到りし歐米人は(此人々は余の思し程野蠻にあらず又毛だらけの人にもあらず)と云へり

第九章　アイヌの元始

前言。オキクルミの事。神の人間を造り給ひし事。人間の造らるゝ時獺の働の事。アイヌの元始の口傳アイヌの祖先に動物ありし事。アイヌ熊より生出せし事。アイヌの動物崇拜に於ける鰲の事。

第二章に記せし所に依れば和人の未だ日本國に存在せざる以前よりアイヌ人種ありアイヌ人種は何處より移り來りし乎未だ確かならず と雖も彼等は北方より來りし者と思はる何となれば其習慣及格別に熊を拜むことは唯北方に居る人民中にのみ存する習慣なり又彼等の人と別るゝ時は左樣ならと云ふべき所にポプケーノーヲカイヤアン

Popke no okai yan 即己れを暖かに御保ちなさいと云ふ語を用ゆ北より來りし事を示すなりと思ふ何となれば此の言方は熱帶國の人の用ゆる方言にあらざればなり

又本書第八章に或アイヌの口傳に依れば此人種の祖先にアイヲイナと云へる者ありしことを說き且語學に依り其名稱を詳かに分析すれば彼は恐くは種々生活するに必要なる學藝を敎へし事ありしを示せり故に彼のアイヌの祖先なりとの理論は信ずるに足らざるものなりと云はざるべからず

數年前に死去せし一人のアイヌの話に依れば(アイヌの祖先にオキクルミ Okikurumi と稱する者あり彼は天より降り實に極大古平取に臨み給ひしがッレシー turesh と稱する夫人あり其名を省略せず全く云はゞオキクルミッレシマヂ Okikurumi turesh machi なり此名を譯ばオ

キクルミの妹なる妻と云ふ義なり此夫人は一男を生みワリウチクル Wariune guru と名づけたり而してアイヌ人種は皆此人より生出せりと云へり又他の人の話に依れば此人は全くアイヌの祖先にあらずして宗敎と政法とを訓へんが爲め造物主なる最上の神より此世界に遣はされしなりと云ふ又ワリウチクルは生活の方法を敎ゆる爲めに遣はされしが其後に至りオキクルミは此子と共に樺太に於て戰ひ終に殺されたりと余輩は此事を考覈し且種々稽査せしことありしがオキクルミは日本々島より蝦夷に逃げ來りし九郎判官義經なりと斷定す又他の口傳に依れば彼は樺太にて死せりと云ふ

又此人種の元始に就き極めて單簡なる口傳あり下の如し(最初神の人を創造し給ひし時土を以て體を造り藁縷を以て毛を造り柳木を以て脊骨を造りたり故に人年老ぬれば腰屈むなり)と今一つ他の口傳あり

（神世界を創造し給ひし後種々の草木地上に生出するに至りしが其全く生出せし後人間を造り給ひ人間を造り給ふには柳木を伐り以て之を脊骨とし土を其間に塡充し給へり故に人年老ぬれば古木の如く曲りて鹿の如く屈みて歩むなりと云ふ

憤怒せる女人等の罵る詞の中にシュヌマウシユク Shununaush yuk と云ふ語を聞きしこと屢ありたり或人の云へるに此語は即年老ひ毛脱け今將に死んとし歩むことと能はざる齒の無き鹿を指し云ふ語ありと又他の人の云へるには即痩衰へ秋晩く產れ成長せざる鹿を指して云ふ語なりと此前の或人の云へる意味を以て云ふ時は益に立たず或は馬鹿或は駝青と云ふに同し意味ならんと思ふ

今一の口傳に依れば最初造物主の造らんと爲し給ひたる人間は今現在の人間の如くに不完全にあらさりしに獺の不注意の爲め人間の全

美に造られさりしなりと云ふ口傳あり即ち左の如し

人間の造らるゝ時獺の不注意なりし口傳

（神人間を造り給ひつゝあり最早出來上らんとする時偶然止むを得ざる用事起り天に歸り給はざるべからざることゝ爲りしが其時に傍に在りし獺を呼びて云ひ給ふに（今我は用事あり將に天に歸らんとす然れども他の神を代りに遣はし我着手せし業を終らしむべきに依り其神來らば能く人間の形を造ることを傳へ敎へよ）と云ひ給ひたり獺は其命を奉じ具さに誤なく傳ふべしと受合たれども彼は川の上下を泳ぎ遊び魚を漁る外餘念なかりしが故遂に神の命を傳へることを忘れたり之に由りてアイヌは神の思召の如くに全美に造られず誠に不完全なり故に神は獺を詛ひ全く記憶力を奪ひ給へり）と云ふ

アイヌの生物より生出せる事

此後の章に記す所に依れば鴉海鵜鷲鳶梟鶉等の如き鳥類は恐くは大古アイヌ人種の宗族に於て動物崇拝的神あらんと思はる現今と雖此等の鳥類はアイヌに崇拝せられ犠牲に供せらるアイヌは悉く皆此の如き鳥類より生出せるものとは今は云はざれども或人は此の如き生物より生出せりと信ずる者あり然れども今日に至りてはアイヌに向ひ汝は鳥類の子孫なりと云はゞ其無禮を怒るべしと雖も熊の子孫なりと云ふは無禮と思はざるなり然れども犬はアイヌの動物崇拝的神にあらざるが故に犬を崇拝し或は犠牲に供することなく又其肉は決して之を食はざるなり

アイヌの熊より生出せる口傳

(大古夫婦二人のアイヌあり夫は或時病に罹り子なくして死去し其妻一人殘されしが誠に不思儀にも此寡婦は俄に妊娠せり故に人々は此

女に又夫あるなりと云ひ或は否亡夫墓より復活りし出來榮なりと云ひ評判せしが此女自からは曰く(我孕みしは人に由るにあらず或夜我自分の家に在りし時忽然我目の前に現出せし者あり其外貌は人の形にて衣服は黑かりし彼我に向ひて曰く(女よ一言云はん注意して聞よがし我は人の形にて顯はれたれども實は山を有つ神(即熊)にして人類にあらず我此處に現れ出でしは汝の夫近頃死し汝獨物寂しく暮す我之を憫み汝は子を生まねばならぬことを告知らす爲に來れり即此子は我の汝に與ふる賜なり其子生れあば汝は寂しきを忘れ且成長の後は甚だ有名なる辨舌者となるべしと云ひし後彼の姿は消失せしが我孕みしは之が爲なりと語れり然れども人々は此話を聞き冷笑ふのみなれども驚く可き哉此寡婦男子を生みたり此子漸く成長し富める者となり有名の者となり辨舌者となり能き獵師となり啻に此のみな

らず彼は衆多の子女の父となれり故に今日と雖も山村に住ふ多くのアイヌは皆熊の子孫なりと云ふ彼等は熊の宗族に屬する者にしてキウンカムイサニキリ Kimun kamui sanikiri と云ふ即ち熊の子孫の義なり此宗教に屬する者は甚だ威張りて曰く我は山の神の子なり山の持主なる神の子孫なりとて誠に傲り高ぶれり此口傳に依りて見れば動物崇拜に屬せるものと思はる

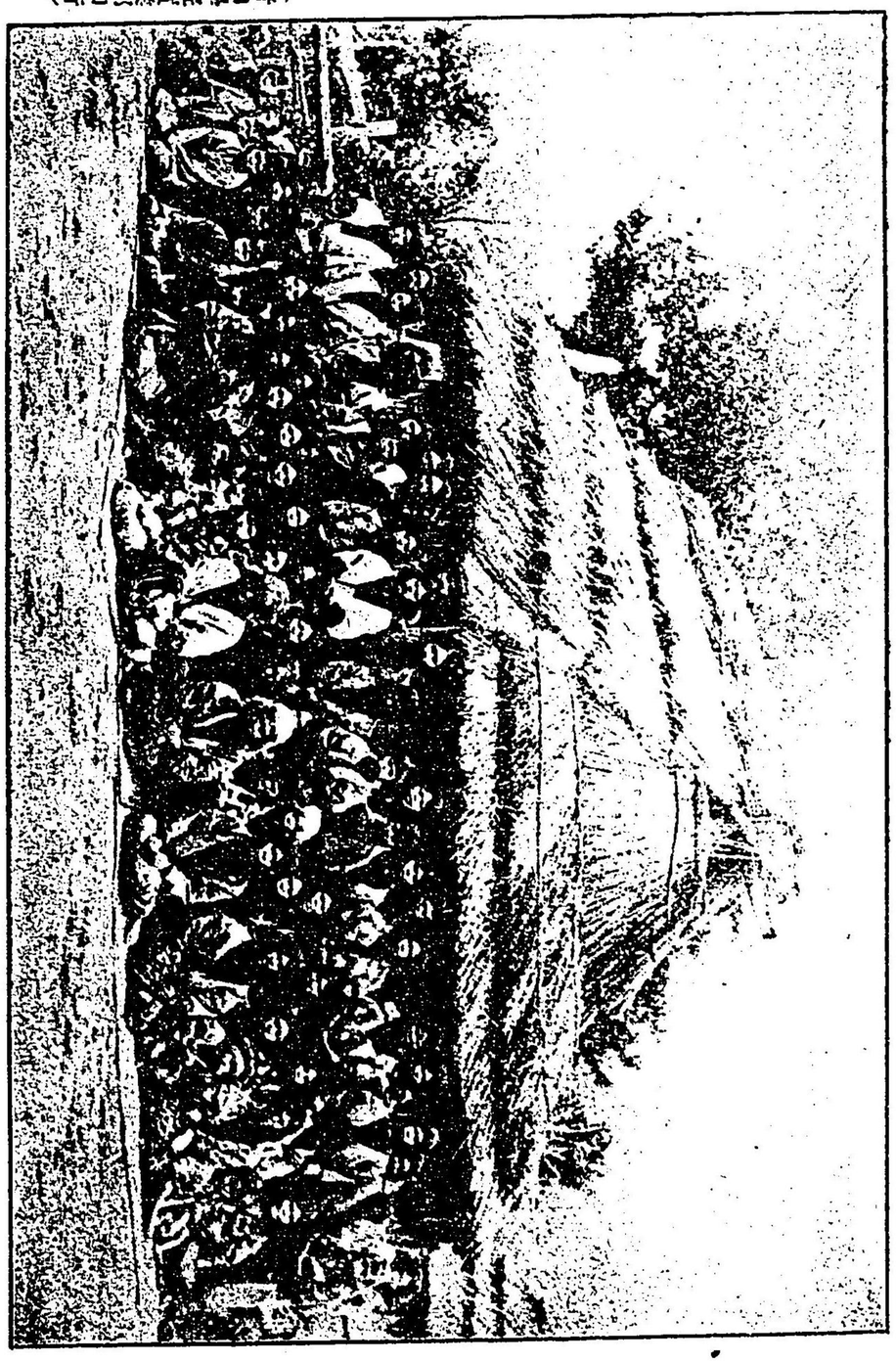
著者はアイヌの喧嘩口論するを見しに相互に字を付け或は鷲の子或はあの鳥の子と罵り呼ぶを聞きて驚きたり而して今詳かに其由來を問はゞ各宗族に於ける動物崇拜は其罵り呼ぶ詞の中に在りと信ず今現に著者の家に居る一人のアイヌは我曾祖は鷲に持ち來られ或は鷲より生れたりと云ひ彼は以前之を信じて疑はざりしあり

アイヌの鷲より生出せし口傳

(鷲は最來天より降りて今は此世界に居るなれども其世來に來らざりし以前の居所は下の雲の直ぐ上にてありしなり此世界に降りては山に穴を掘りて住む此鳥は甚だ短氣にして或時は怒りて人を殺傷することあり故に此鳥を怒らざらしめんには之を崇拜せざるべからず然るときは彼喜びて巧に獵獲し屢海に飛行き温肭江豚魚海馬等の如き大なるものと雖掴み來ることありアイヌ之を見て集會を催し彼能くアイヌを助けなばイナヲを捧げ崇拜すべしと議定し祈る時アイヌ彼に向て曰く(嗚呼鷲の神よ願くはアイヌ地に來らせ支配し給へ我等病に罹り食物乏しき時助け給へ何卒來りて我等の主となり給へ若し此願を許し給はゞ我等は後に至るまで汝を拜み祈を捧げ奉らん)とアイヌの鷲を拜むには此祈を用ゆと云ふ

鷲は此祈を聞き欣然として大に喜び甚だ快く之を承諾し毎日海に飛

び行きアイヌの爲に大なる魚を握み來る故にアイヌは甚だ善き食物を得て樂しく生活せり此地に近き所に住める或アイヌに娶らんとする一人の美しき女ありしが行きて訪問すれば其女は逃れ去りて此訪問者の歸る迄は歸り來らざりし不思儀なる哉其女孕みて子を生めり然れども其父は誰なるか何人も之を知らず其子は健全美麗にして身体偉大なり産後此女の夫とならんとする者來訪せしに女は子を脊負ひて前の如く又逃げ去り後再び歸り來らざる故付の人々寄り集ひ八方に人を遣して搜せしが遂に尋ね出す能はざるが故最早此女と子供は見る能はざるものと思ひ諦めしが豈圖らんや鷲の巣の中にて此子供の啼聲を聞けり之を聞き人々皆大に怒りて曰く(神なる鷲よ汝は此の如き惡事を爲し不親切なる行を致せしが故我等は此後は汝を拜まざるなり速に何處かへ歸りて此處を去れよ)鷲は之を聞き心配して



(東京帝國博物館蔵)

A GROUP OF AINU TAKES AT PIRATORI.

貝塚しり擬てに取る

涙を流し啼て曰く(我は實に汝等に向ひ惡しき行を爲せり然れども此子供成長すれば實に有名にして最良の獵師となり能く諸民を扶助すべし而して我は神にして此後此よりアイヌ地に住はず願くは我詞を聞きて怒ること勿れ我はイナヲを好む故今後も相變らず之を捧げらるべし)と云ひたれども人々は益怒り罵る故彼は又曰く(汝等が斯く無情なれば我は此女と子供とを共に掴み携へて去るべし)と云ひ終りし後鷲は此両人を掴み空中に登り鳴きながら飛び去りたりしが沙流山の頂を過る時鷲も女も子供も大聲を上げて叫べり人々其聲を聞き皆家より出でゝ女と子供を掴み行く鷲を見たり然る時老人等鷲に向つて曰く(嗚呼神なる鷲よ汝は怒りて涙を溢し來りつゝあれども我等の云ふ所を能く聞くべし汝は甚だ立腹せる如くなれども汝は大なる神なれば怒りて女子供を掴み去るが如きは誠に神的所業にあらざるが

故に彼等を此處に放ち置き給へ然るときは我等イナヲを捧げ拜むべし)とて老人拜せり此鷲は大なる力ある神なれども雨の如き涙を溢し老人等の上に落して曰く(我は今まで人間を扶助しアイヌ地を支配せり然れども我は神なれば何時までもアイヌ地のみ支配し難し故に此女に子供を生しめたり然るに人々立腹して我を怒り罵るを以て我怒り女子供諸共に掴み去りしなり然れども老人等よ汝等の云ふ如く我は大なる神にして彼等を掴み去るは適當なる神的所業にあらざるが故に天に在す萬物の支配者なる大神之を見給はゞ我を罰せらるべし故に我今此女子供を汝の所に放ち置く何卒能く愛育せらるべし我はイナヲと禮拜を好むが故に我にイナヲを捧げ禮拜を爲すべし左すれば我能く汝等を守護すべし)と云ひ女と子供を其處に放ち置きて去りたり此母子二人は其村にて保育せられ現今と雖其子孫アイヌの中に

在り其由來此の如くなるが今日も鷲を拜み酒を供へて飲む者あり酒に醉ひ喧嘩する時は相互に罵りて曰く(鳥の子なる己)又は(鷲の子なる奴)と云へりと云ふ

第十章　キウピット Cupid 及オキ・クルミ

Okikurumi の事

鶺鴒キウピットになりし事。キウピット夫婦の務を教ゆる事。オキクルミ女を愛する事。義經を拜ざる事。平取村に於ける義經の祠の事

大古希臘人拉丁人のキウピットを有するが如くアイヌも亦同じ者を有す而してアイヌの有するキウピットは翼あり温厚の顔と美目を有つ小兒の如き者にあらずして小さき鳥即鶺鴒なり

本書の前章に此世界の創造せらるゝ時鶺鴒來りて之を助けし事を述べ又他の口傳に依り此鳥荒き地を搔き均し平らかにせし事を記せし

が其外此鳥はアイヌ人夫婦相互に爲すべき務を教へし鳥なりと見ゆ且此鳥は相戀相愛する男女を守護せることありと見ゆ余輩の聞く所に依れば或若き男子鶺鴒の皮と骨をイナヲの削り屑に包み之を箱に入れ守札の如く大切に爲し屢拜むことありて格別に妻女を望み又は女子の愛を求むる時に拜むなり下に記載する口傳は其事を示す

鶺鴒は或人之をオチウチリ Ochiuchiri と呼ふ即情慾の鳥と云ふ義なり此鳥は情慾深きに因り其名を得たるなり神人間を造り此世界に置き給ひし後鶺鴒彼等に來り子孫を生殖するに必要なる夫婦の爲すべき務を教へり此鳥の親切なる教に由り人間は此世界に於て蕃殖せり故に此鳥を守にすれば能く其効能あるなり或日一人のアイヌ一羽の鶺鴒を捕へて之を殺し其死屍を以て守とするや否其人忽ち甚だ情慾强き者となりて屢煩腦に苦められ不品行を爲せし故罰金を取られしか

六年を經たる後彼は全く悔改めて甚だ富者となりたり彼は此鵜鴒の守を持ちし故此の如くに爲りしなり誰にても此守を持つ者は必らず六年間は甚だ情慾强く其後彼若し能く自から省みて悔改めなば富者になり能ふ)と云ふ

本書第九章即アイヌの元始に就き記せし章に於てアイヌのオキクルミより生出せしことを說きたり此事を說くときオキクルミは恐らくは九郎判官源義經ならんと云ひ又彼は蝦夷に於て土人の娘を妻にせしことを記せしか以下に記載する口傳に依れば彼は其妻を深く愛したりと見ゆ而して此口傳の目的は若き男女の相互に深く相戀ひ相愛しつゝある間に不意の事起りても失望せざることを敎へしものゝ如くにして即其戀愛する所の人と離るゝことあるも失望すべきものにあらざることを敎へ又鶴鴒のキウピットの如く行ひしことを述べたるものなり

口傳

(彼の雄壯なるオキクルミは女を深く愛せし故に病身となれり實は戀の病に罹りたるなり彼は憂鬱として食物を好まず体力次第に衰へて氣色惡しく一室に籠りて果は好きものも惡しきものも飲食せず一口に云へば戀の淵に沈み死に垂んとせり此は是れ唯一時に止るのみなりと雖病の源は美女を見し故なり彼は誠に慨はしき有樣に陷りたり若き人よ深く鑑み意を留められよ然れども

オキクルミは此病より逃れて平癒せり小なる鵜鴒飛んでオキクルミの愛する女の家に入り彼の病みて命旦夕に迫る由を告げたり此美麗なる小鳥は彼女の耳の邊に來り尾を搖り曰くオキクルミ若し死なばアイヌ地の生命おきに至る故にアイヌの爲早く戀慕ふオキクルミの許に來り給へと云へり而し

して其行きしは彼の戀慕ふ女ならで幽靈が彼女の形に擬ひ彼の家に入れり而して入りて室内を取片付つゝありしがオキクルミは裳を窺き見て大に喜びたり故に彼は此時より朝は早く起き常の如く飲食し強壯舊に復せしが彼女は外に出て再家に歸り來らず彼は全く幽靈に欺かれしなり最早詮方なしと自から思ひ諦めて前の如く賢者となりし)と云ふ而して尙此外に左に記載する口傳あり前の口傳を說明せしものならん

(彼女神(即美女獨り物寂しさの餘家の内外を見廻はしつゝありしがやがて外に出て仰きて層雲の累々としてアイヌ地の上に雛くを詠め居たりしが彼の美しきことよ云ひて背に歩みて家に入り針仕事を爲したり)と云ふ蓋し彼女初めてオキクルミに見へたるならんと思ふ何となれは彼女暫らく家に在り獨り物寂しくなりし故室内を彼處此處と

見廻はしたる後何心なく外に出て天を詠め甚た美しきに感せり後に家に歸るに背に歩みて入たりと云ふは貴人を見て歸りたりと云ふ意味にして即是彼女初めてオキクルミに見へたるならん

(扨彼女は針の頭と先を見たり)即能く働く義なり(然るとき小き鳥即鵜鴒來り窓の緣にて尾を搖り曰く(彼の有名なるオキクルミはアイヌ地を支配する者にして今少し前家より出てしに汝を見初め深く戀慕して病めり惡き魚二善き魚二其食膳に供へたれども食られず若しオキクルミ死し給はゝアイヌ地の生命なきに至らんと云ひ然る後此小鳥尾を搖りなから又云ひけるはオキクルミの全快する樣に我等を憐み助け給へと之に由り見ればオキクルミは家より出てゝ只一目彼の美女を見て深く戀慕し病に罹るに至りしなり故に女神の靈此美女の形に擬ふてオキクルミの許に來りしかばオキクルミ此美女を見て大に

喜ひ起きて食物を食し強壯になりたるに美女消失せて姿を留めず彼は全く欺かれたりと知り其後は思ひ諦めたれは健康全く舊に復せり）

と云ふ

世の人多くは思へりアイヌは義經を崇拜す故に平取村に義經の祠ありと然れとも其祠はアイヌの造りしにあらす和人の造りしものにして其中に安置する像も和人の製なり像の裏面に記したる所に依れは凡百十年前の作なりと思ふ此外此事に關する事跡明かならず而して二十年以前には其祠に參り義經の像を拜む者絶へて無し又當時のアイヌは義經の所業を善しとせず人々皆之を惡しき樣に罵しれり口傳に依れは義經は種々の生物を造りたれとも其造りし所のものは運の惡るきカッコ鳥又は蛇の類にしてアイヌの書物を盜み取りしことさるあるなりと云ふ故に昔は神として崇拜する者あらすと云ふは事實

ならんと思ふ

著者曾て平取村に滯在せしが其間に、義經の祠にイナヲを捧けしを見しことあり其時下の如き祈らしき語を聞けり曰く（我神的義經よ汝の惠に依り我は屢酒を飲むことを得るなり故に我汝に感謝し汝を崇拜す）と此語は全く祈と云ふに足らす又他の人此祠を稱して十五六年以前にはペンリの酒の罠なりと云ひしことを聞きたり彼此綜合して考ふるに義經を神として崇拜せざることを信するに足るへし

第十一章　柳の樹の崇拜物質

動植物崇拜の解明。人命の所在。人の生れし時柳樹のイナヲを造る事。人命柳の樹に結び合ふ事。

大古より各國に存在せし未開人種の如くアイヌも亦其教法は動植物崇拜的民族たるは驚く可きことにあらず此教法は全世界に普及せるものなるが故に若しアイヌの此教法に屬せざることあらば却て怪しむべきことならんと思ふ歐米並東洋人に定紋を用ゆる者あり恐くは是皆古代の民族が動植物崇拜の徽章として之を使用せしものならん現今に至り極めて著明なる動植物崇拜者は亞米利加印度人中に在り彼の人民は狼熊海狸海龜鹿鳴鵠鷲鷹鶴鴨等を以て動物崇拜的種族の神とせりアイヌの動植物崇拜者たることは未た曾て書籍に記せしも

のあるを見ずと雖アイヌは亞米利加印度人の加く實に此教法に屬せり勿論此印度人の如くに顯著ならざれども余輩アイヌの習慣を考察し言語を研究し尚又其口傳を聞き彼此綜合して其確實なるを信ずるに至れり

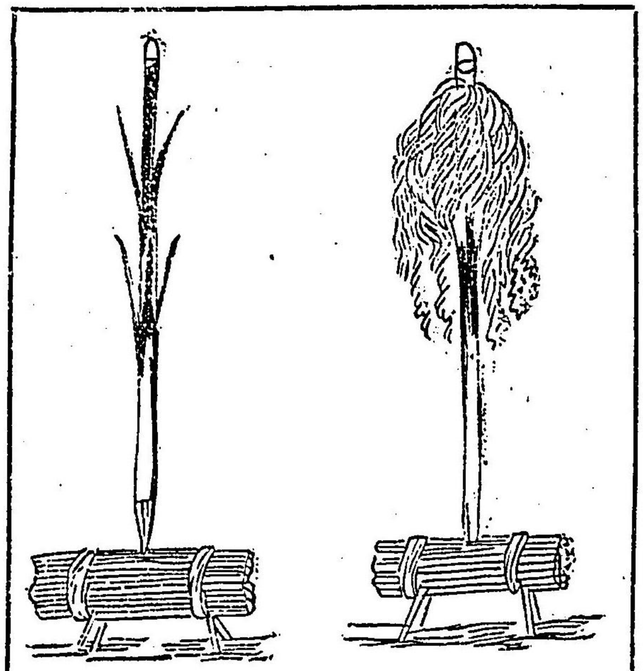
ウェブスター氏の辞書に依ればトーテム Totem 即動植物の神は或は鳥類或は獸類の繪にして亞米利加印度人が表號的の名稱或は家族の名稱に用ゆるものなりと云へり而して此事を詳に研究せんとする者は此解明を以て未だ滿足せざるならん何とおれば動植物崇拜的神は啻に繪畫又は表號的名稱に止らずして此民族に格別因緣ある鳥類獸類魚類昆虫類を用ゆ其此の如く之を重用するは其元始に於て血緣の存するに由り繪畫又は物像をして其形狀を擬し置くなり

柳樹の神はアイヌ人種として生れたる者には甚だ近緣ありと云ふ此

柳若し鳥獸ならば此柳とアイヌとは血緣ありと云ふを得べし本書第九章にアイヌの元祖の脊骨は柳樹にて造られしことを記せしが其脊骨柳樹なるを以て誠に柔軟なりと云ふ著者の思考する所に依れば人間の脊骨と柳樹とは其柔軟撓み易き所相似るを以て此動植物崇拜說を研究するには甚だ主要にして常に能く記憶すべき價値ありと思ふ何となれば論理に依り此事を推究すれば大古アイヌ人が全く離隔せる別界の物の生命と性質を辨知せざる時代ありしことを示せり扨アイヌ人種の脊骨は柳の樹にて造り肉体中重要の部分とせり人の生命は他の人種の思ふ如く或は血液或は神經に在りと思はず脊骨に在りと思へり故に柳の樹と人の生命との因緣は實に重要なるものとせるが故アイヌの此樹を貴要するは驚くべきことにあらず又古代に於ては軍人の脊骨を切斷するにあらざれば他の骨肉は之を粉碎する

も絕命せざるものとせり然れども脊骨を切るときは人の命は忽ち去つて神の國へ行くと云ふ

アイヌ人の子供出產する時は其伯父或は父又は他の親族川の邊に行き新しき柳樹を伐りて家に持ち歸り鄭重柳の樹にしてシュッ Shutu なり(即捧と云ふ義なり)第二はイナヲキケにイナヲを造り恭しく之を拜みて後其子供の寢床の傍に置き守護の神とす此處に掲げし繪は之を示すなり第一は



Willow Totem
柳樹の崇拜物質

Inaokike（即削りかけの義）を結びたる所なり第三の枕の如きものはカムイセット Kamuiset と云ひ即神の座と云ふ義にして太き笹を以て造られ之に柳の樹を挿す樹の腐れざる爲なり總て此等を合せてシュッイナヲカムイ Shutn inao kamui と稱し子供の成長を祝福する守護の神なりと云ふ

守護の神即柳の口傳

（人間の脊骨は柳の樹にて造らるゝ故子供出産すれば其父又は伯父等の男子直に柳の樹を伐り以てイナヲを造り其イナヲを能く削りたる後之に向つて下の如く祈る（イナヲなる神よ汝は神なるが故我等今拜まんとす始めに神人間を造り給ふ時柳の樹を以て其脊骨を造り給へり故に柳イナヲよ此子供の成長する間守護し給へ能く之を守護し健康にして壽命長からしめ給へ）と此祈を爲したる後其イナヲを取り恭

しく子供の寢床の傍に持行くべし而して子供成長すれば屢酒を供へて此守護の神を拜むべし）と其口傳此の如くなる故柳の樹は蝦夷地に生れたるアイヌの植物崇拜に屬する守護神なりと定められしなり」

アイヌ病に罹れば格別に此アイヌを拜むを當然の事とし又子供等に下の如き祈を敎ゆ（嗚呼柳の神よ汝は我身の脊骨なるが故に早く我病を癒し給へ早く我を健康にし給へ嗚呼我愛する神よ我は病氣にして身体甚だ弱き者なり願くは早く我を助け給はんことを）と能く謹み恭しく只管に此祈をすれば柳の樹は必らず其人を助け病を癒すと云ふ

成年の人と雖若し病に罹れば老人等屢相集り柳の樹にてイナヲを造り之を拜みて後恭しく取り家の外なる幣を置く所に立て置けり若し其柳根を發し成長すれば甚だ大に之を喜ぶ何となれば病人快復し長く生存ふ兆なりと信ずればなり又前に述べたる子供の爲に造りしイ

ナヲが家の内にて根を發し成長する時も亦同じく大に喜び賀す何となれば是れが吉兆となり其子供健全強壯にして能く成育し壽命長きのみならず賢明なる酋長となるべしと信ずればあり此事は古昔アーヤン人種即羅馬チユウトン人種の信せし「生木」Birth tree 却子供の生れし時植ゆる樹の話に似たる所あり讀者よ此柳樹の事は昔より日本人に存せし習慣なる三月節句の雛祭に柳の枝を用ゆることゝ關係あるや否を考らるべし

第十二章　幣及イナヲの概說

幣の解明。イナヲを造る時。イナヲの置所。イナヲの解明。物体崇拜の事。アイヌの偶像教

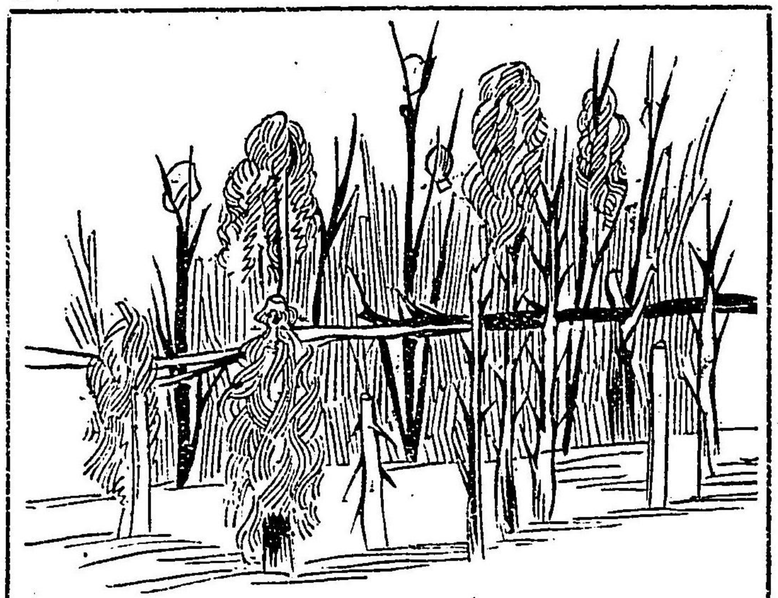
五六十年以前現今の如く未だ和人が蝦夷地に於て多くアイヌと交通せざる時アイヌ部落に入るや先づ第一に目に着くものは削りたる木と獸類の骸骨總て各家の東窓外に在るを見て驚くべし舊暦二月か又は三月頃に行かば此等のものゝ雪の上日向に曝さるゝを見るべし此處に種々のイナヲあり或は長きものあり或は短きものあり或は下より上に削りたるものあり或は上より下に削りたるものあり又或は少しも削らざる木あり唯削りたる木の儘單一のものは之をイナヲと稱す而して之を組合せたるものは之を幣と稱す故に幣は教法に遵奉し組合せし削りたる木なりと解明せば可なるべし

然れども唯舊暦二三月頃に限りイナヲを以て幣を造るものと思ふ可からず幣は屢之を造るものにして例令へば家の新築人の死亡熊送り又は春種蒔の前の如き祝日等には何日にても之を造る然れども此は格別なる場合にして固より日本の風俗又は基督教には毫も適合せし所なく普通舊暦二三月頃に造るを常例とす

此幣は雷に人家の邊にて見るのみに限らず漁船を定繋する海岸にも亦之を見る此は海神に捧げしものにして之をケマウシナヲ Kema ush inao と稱す即足あるイナヲと云ふ義なり而して此イナヲに他の木を補ひ結び足とする故に足あると云ふなり

アイヌの事に關する他の著者の書物を讀みし人はイナヲの解明を唯削りたる柳の木なりとすべけれども以下の章に記せしイナヲの解明と相比ぶれば其足らざる所あるを知らるべし何となれば柳の木を以

てイナヲを造るのみならず他の種々の木を用ひ且悉く皆削るにも限らざる故あり余輩の屢爲したる演說及其自著の書物中にアイヌはイナヲを拜むにあらず唯神を崇敬する爲に之を捧るなりと云しが此は余輩の粗忽と



Nusa or large cluster of inao.
幣即イナヲノ集

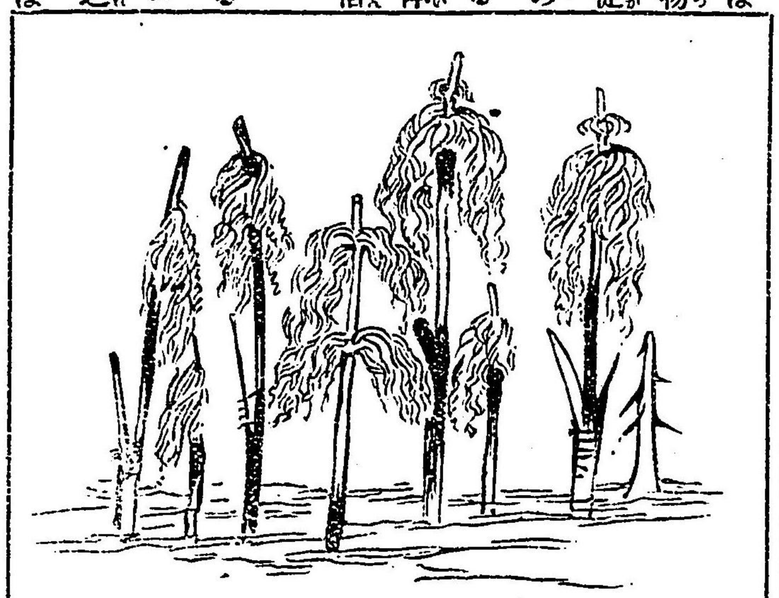
謂はざるべからず何となれば或イナヲは唯神に捧るのみにして拜まざれども他のイナヲは之を拜めばなり其拜まざるイナヲは或は捧げ

物或は守にするなりと思はる而して其拜むイナヲは總て神々に遣はす使なりと考ふ其實イナヲは守とせられ或ものは生命あるものとし他のものは格別活潑の生命あるものとせざれども其中には必らず生命の存するものと思へり故に塲合と人とに依りて或は拜まれ或は拜まれざるなり

アイヌ中に存する物体崇拜を詳に解明するは誠に難く殊に僅に一章のみにて之を盡すこと能はず以下に記す所は著者自からの實驗に依り之を例解するに勉むべし其能く之を成し得るや否は讀者の見らるゝ所に任す抑アイヌに於ける物体崇拜の概要を擧れば現に在る所の物は其物に幾分の因縁ある生ける靈の冥助を蒙るべし故に其物質を尊崇敬重すれば天災疾病悪魔を移除する守となるなりと思ふ若し其物質或は腐朽し或は亡失するときは必らず其威勢を失ひ之を有つ者

何の助も蒙る能はざるのみならず物質の亡失するに從ひ其之を有つ者の生命も亦亡失するものとし深く物体崇拜を爲す者と信ず

アイヌの重要なるイナヲの柄はドスナラの木を以て之を造る何となれば



Nusa set up upon the sea-shore.

幣るた建に岸海

此木は他の木よりも堅牢にて土に着けありても早く腐朽せざるが爲めなり此事に就き余輩はアイヌに問ひしに彼曰く此の重要なる物を造るにドスナヲより他の木

を用ゆる者は賢からざるなり何となれば古昔或アイヌは桂の木を以て之を造りしが其後間もなく其柄腐れて倒れたり後又之を造りし人も亦自ら衰へて死したり即是其物質の威勢亡失せしが故あり故に他の木よりも堅牢なるドスナラの木を以てイナヲの柄を造ることの當然あるを知らるべし然れども若しドスナラの無き土地にて之を造る時は柳又は桂の木を以て造るも可ありと雖其腐さらざる前に早く之を棄つべし其之を棄つるには或は遙かに遠き林の中に投げるか又は悲しく之を爐に入れ燒くべし而して其代に新しきものを造れば可なりイナヲは誠に大事のものなれば若しドスナラの木なくば前に云ふ法に從ひ柄を造らざるべからずと云ふ

偶像敎は或人の解明に依れば偶像中に存在する靈或は神の生命を拜するなりと云ひ又は人は生命の有無を問はず人々の感情を起さしむ

る爲に其面前に於て木像なり畫像なり何にても或物体の前に恭しく跪きて崇敬拜禮するなりと云ふ此解明の孰れにしてもアイヌは偶像敎に屬せり何となればアイヌの崇拜物質は必ず偶像なればなり余輩は始め不審にしてアイヌは偶像を信せずと云ひしが尙詳に研究すれば偶像信者なること產あきに至れり其果して偶像敎に屬するや否は本書に依り讀者自から判斷せらるべし而してイナヲの一は必らず總てのアイヌの家にあり此は甚だ大事のものにて造物主なる神と人の神との間にある第二位の神なりと云ふアイヌは神に幾多の位階ありと信じ遠き神と近き神に捧ぐるには各別のイナヲありと云ふ遠き神とは人界より遙に隔たりたる所に在す諸神を云ひ近き神とは此世界及人々に接近して在す小神を云ふ故にアイヌの思ふには神の人間を支配し給ふは恰も此世界に於て國王か百官をして人民を支配する

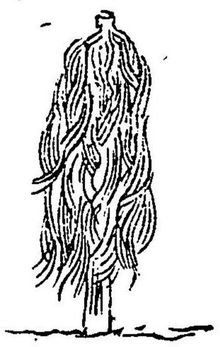
と同一なりとするあり

第十三章　重要かるイナヲの物質

家のイナヲ。此イナヲを造る事。此イナヲを聖別する事。火の神の夫。縞れたるイナヲ。垂れたるイナヲ。前後を削りたるイナヲ。

最重要なるイナヲをチセコロイナヲ Chisei koro inao 即家を保つイナヲと云ふ家々に必らず此の一はあるべきものなり又此イナヲをチセエプンギチエカシ Chisei epunkine ekashi とも云ふ即家を護る先祖の義なり此イナヲには生命ありて常に家族を護り健康を保たしめる務あるものなりとアイヌは云へり此イナヲを置く所はアイヌの住家の東北にある寶物置場の後にして此處に建て置き屢拜むことあり又稀には火の傍に捧げ家の主人之を拜むことあり此イナヲは其名の如く男性に

して其妻の名はアベカムイ Abe kamui. 即火の神の女神と云ふ此火の女神は後章に記すべし多くのアイヌの話に依れば此イナヨの原形は世界開闢の時天より造物主の送り給ひしものなりと云ふ此の如く云ふは頗る便利なり何となれば天與のイナヨに就き或アイヌは、曰く家の持主(即イナヨ)は眞の神にして最初に造られ火の女神の夫となり女神を扶け人々を守護する爲に造られし故之を「家を護る先祖」と名けしなりと云へり此イナヨを造るには凡そ厚一寸位のドヌナラの生木を長二尺位に切り其柄とす其木の表皮を上より下まで能く研ぎたる庖刀を以て削りものとするを以て何人も之を議論するを得ずしてアイヌ之を満足すればなり此



(Chisei koro inao)
The house-hold inao
家を護る即チチセコロイナヨ
保つチチセコロイナヨ

之を人形の前とす頂上の近き所に横に切形を着け之を其口とす又其少し下に心臓を結び付く此心臓は火の中より取りたる新らしくして暖き黒灰にて柳の木の綿れたる削り屑を以て木に結ぶありアイヌは其柄をチトバ Netoba と稱す即体と云ふ義なり余輩は此名を聞きチトバとは其全体の名なりと思ひ誤り記せしことありしが余輩の記せし如くして書を著はしたる人々は余輩と同ブンギチエカシと云ふ其心臓を能く堅く木に結び付けたる後柳の木の多くの削り屑を取り

Inao netoba
Stem of the Household inao
家を保つ即チチセコロイナヨ
チトバ幹のチチセコロイナヨ

人形の口と心臟とを蔽ひ隱すこと繪に示せるが如し而して最恭しく之を爲し終りたる後謹み敬ひて之を火の傍に建て聖別する爲め下の如く祈を爲す(嗚呼イナヲよ汝は是より火の女神と共に此家に住み給ふならん汝は其夫となり其建たせ給ふ所は寶物置場の後なり願くは火の女神を扶け給ひて能く我等を守護し給はんことを)と此祈を捧げし後酒を供へて之を飲む而して其イナヲをチセコロイナヲ又は神的先祖の名を以て稱す

若し能く此人々の事を了解せんと欲せば前に記載せし說明に就き記憶すべきこと二あり其一は前章中に桂の木にてイナヲの柄を造りしアイヌの生命其柄と結び合ふて其柄の腐されしと共に其生命も亦亡びしことを記せしが此思想の根柢たる主義は同感の魔術Sympathistic magicと云ふ曖昧語に包含せりと思ふ今日にてもアイヌの思ふにはイナヲ

又は他の物質は必らず其持主の生命と或事情に於て幾分か勢力を與ふことを信せり又第十一章中にも人間の脊骨と柳の木の相關係するものなりとするを見れば其思想に必らず同感の魔術の主義を包含せるが如し又其二は火と重要なるイナヲと相關係することなり火の女神はイナヲの妻とす故に其火の灰を以てすることを知れば別に驚くべきことにはあらざるなり

Kike-chinoye inao
Fetich with curled shavings.
キケチノエイナヲ

今此處に綴れたるイナヲに就き考へんとするに前に記せし家を護るイナヲは殆んど偶像の如くにして現今も尙之を拜めり其次のイナヲ

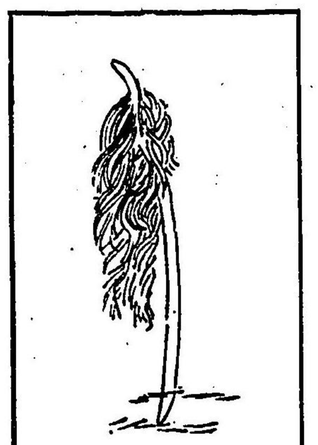
イナヲの心臟とせり始めて之を聞くときは奇怪なるに驚けどもアイヌが火を崇拜

はキケチノヱイナヲ Kike Chinoye inao 即削り屑の綴れたるイナヲと云ふ義なり此は長く幣の所にて総て他のイナヲの上に出づ而して此イナヲは他の木を補ひ足ざる其足されたる木も亦イナヲのヲトバ即体と稱す此イナヲは屢拜まれ又は守として持たるゝ故アイヌの多くは皆諸の神に捧ぐべき捧物なりと考ふ著者の視察せし此イナヲは皆柳の木又は水木にて造られたりアイヌは此等の種類の木にて此イナヲを造るは當然なりと云ふ著者は此イナヲを捧ぐるを屢見しことあり或時は酒と共に火の女神に捧げ下の如く祈れり(嗚呼女神よ我等を憐みて能く此家を護り給へ今酒とイナヲを捧げ奉る)と云へり此イナヲは誠に尊敬の意を表すものにして拜む人々に報はれんとする恩惠の進物ならんと思へり

又或時萬物を造り給ひし神にイナヲを捧ぐるを見しが其時は下の祈

を爲せり(最高き天に在す神よ汝は至つて榮光あり最高き天に住み給へり嗚呼世界の造主よ此酒とイナヲを受け納れ給へ之を捧ぐるが故に我等を憐み給へ)と之に由りて見れば此イナヲは神として拜むにあらずして唯神への捧物とするなり

又其次のイナヲはキケパラヒイナヲ kike parase inao と稱せらるる即垂れたる削り屑と云ふ義にして物質はキケパラヒイ崇拜の目的物なり前に記せしイナヲよりも其柄短く其削り屑は能く分れて垂る此は柳の木或は水木の中其土地にて得易き木を以て造らる此イナヲは甚だ廣く用ひられ山川海等に在す多くの神々に捧げらるものにして或時は一個つゝ立て或時は五六個共に立てらるる之を捧

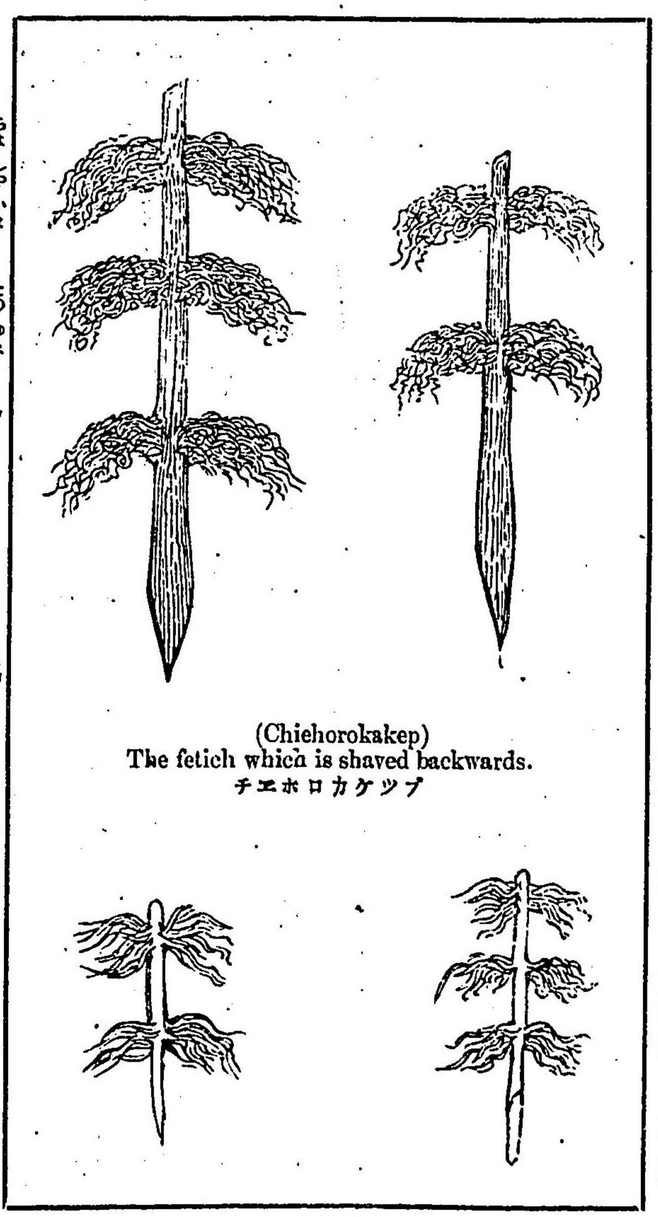


(Kikeparase inao)
Fetich with the shavings spread out.
チナイセラパケキ

ぐる祈は諸神皆一樣の祈なるに依り著者は此處に山神に捧ぐる祈を其一例として下に掲く(嗚呼山神よ何時にても人々病に罹れば早く之を癒し給へ飲食物乏しき時は我等を憐みて豊かに與へ給へ汝は大能の神なり故に我等は祖先の教ゆる所に從ひ此イナヲを造り之を捧げ奉る願くは之を受け納れ喜び給はんことを)と之に由りて見れば此イナヲも亦神として拜むにあらずして唯神への捧物とするなり而して神は其捧物を受け納れて喜ぶものと見ゆ最初より此の如くなりしや否著者は之を知らずと雖總て他の物の如く此物も亦必らず其物自身に一の生命ありとアイヌは思へり

今一廣く用ひらるゝイナヲはチエホロカケツプ Chiehorokakep と云ふ即前後を削りたるイナヲの義なり此は其名の如く上より下へ削られたるものにして其中には或は兩方に三組の削り屑あるものあり或は

兩方に二組の削り屑あるものあり而して何故に或は三組或は二組にするや著者未だ其故を聞かずアイヌ自からも亦之を知らずと云へり



(Chiehorokakep)
The fetich which is shaved backwards.
チエホロカケツプ

其組數は格別之に拘らざれども必らず一組に六本の削り屑あるを必要とせり六はアイヌの全數なればなり

又茲にエハンゲカムイ Ehange kamui 即近き神に捧ぐるイナヲあり近き神と云ふは即人間に接近せる意にして最高き所に在す神と他の神との間に往來して人々を守護する仲媒となるなり此處に一例を示せば此イナヲは泉水、水汲場、船卸場、川端、畑、家の傍、崖の傍、又は火の傍に證かる故に此イナヲは其場所又は其人の守護の神に捧ぐるものと見ゆるなり

第十四章　チカップポチコメシユプ Chikappo chikomesup イナヲの事

此物質の目的。其形狀。木の種類。其上に食物を置くこと。病の性質。

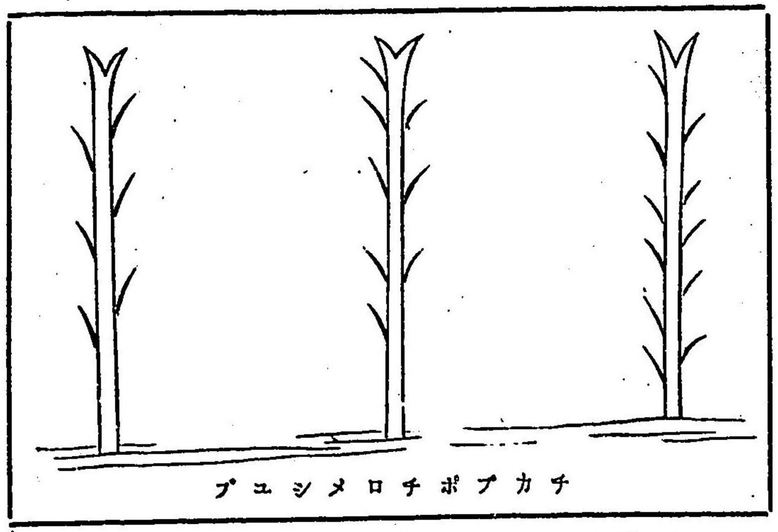
禮拜又は災難除の爲めアイヌは或は鷲或は梟の形に模擬して崇拜物質を造る此事に關し著者は其自著に係る日本亞細亞會 Transactions of the Asiatic Society of Japan と題する書の第二十四章第六十一頁に記載せし事を左に引用すべし

或部落に傳染病流行し格別に猛激にして恐るべき勢あるに因り其近隣の村民は長四尺程のニハトコの木を以て一の守を造り之をチカップポチコメシユプ Chckappo chi-komesuf と稱す即彫みたる小鳥と云ふ義な

り又或はルイシュッイナヲ Rui-shutu inao と稱す太き軍用の棍棒と云ふ義あり能く意を用ひて之を造りたる後直に村の年老と酋長等謹んて之を奉し此傳染病の流行する村界に建て而して後人々只管に拜み其病の侵入を防き災難を除ける樣に祈る此守は實に威德ある守なりとアイヌは深く之を信せり故に之をコタンキッカライナヲ kotan kikkara inao とも云へり即村を防くイナヲと云ふ義なり其之を信することは深きは著者の言を待たさるも明かなるへしと思はる

今此處に示す繪は其イナヲにして木を上より下の方に削りて其切懸は眞直に立つるなり又其木の上端は矢筈に刻めり此矢筈は鷲の口に擬したるものなり何となれば此鳥は此守を建てたる所に於て傳染病を防止めるものと信ずれはなり又梟は誠に親切の鳥にして災難の生し來らんとする時は之を未然に啼き知らすと云ふ而して此木に付著

せる切懸は鳥の羽毛に模擬せしものにして屢其木の上端に食物又は香強き草の類を置くを見しことあり又或人の病に罹る時は之を村界に建るのみならす同し形の少さきイナヲを造り木の上端に食物を懸け窓又は戸の傍に釘打付けあるを見しことあり而して此少さきイナヲは拜まざれとも之を守として置ものなることは確なりと思ふ」



アイヌの教法に依れは此木の切懸けの數は誠に大事にして或イナヲには全數六あり之をイワンラプシュイナヲ Iwan rapush inao と

稱す即六の羽あるイナヲと云ふ義なり或イナヲは七の切懸あり之をアラワンラプシュイナヲ Arawan rapuse inao と稱す即七の羽あるイナヲと云ふ義なり或人は七を以て全數なりと思へども或イナヲは十二の切懸あり之をッウプイカシマワンラプウシュイナヲ Tuikashima wan rapush inao と稱す即十二の羽あるイナヲと云ふ義にて六は全數にして十二は全數の倍と思はる

今上に記載せし事はアイヌの神學鬼神論を學ばざる人には未だ了解し難き所あるべし此木の切懸は鳥の羽毛に模擬せしものなりと云ふに其形は鳥の羽毛の如くならずして何故に逆さに立つやと思ふ者あるべしと雖現今も尙之を逆さにするに非ざればアイヌの思ふには却て之を異とすべし傳染病に罹りて死したり惡鬼横行したり諸人の憂悲むは皆事逆にして通常の死の如く天然の順にあらずして慘酷なる

惡鬼の所業なり死者を葬送する時喪に服する人は必らず衣服を裏返にして逆さにすることあり故に鯨又は梟の形のイナヲも亦之を逆さにするなりと云ふ

此イナヲを造くるに用ゆるニハトコの木をヲシユパラニ Oshpara-ni と稱す即心の幅廣き木と云ふ義なり又或は屢カシカムイエウエンチクニ kashkamui yeuen chikuni と稱す即運の惡き木の義なり何故に此く稱すかは何人も之を知らざれども死し小供の墓に此木を立て墓標とせる故ならん而して此木は甚だ脆きものなるが故短命の表號となるなり此木の大なるものは小供を葬る時昇棒に用ひたる後墓場に置く或アイヌの話に依れば之を昇棒に用ひ墓場に置くはニハトコの木は毒木なれば病の毒とありて病の惡魔を殺すが故なりと云ふ

此イナヲの上端の口に置かれたる余輩の見し食物は或は硫黃と香惡

しき腐れたる雑炊又はイケマ Ikema と云へる香悪しき草の根或は大蒜を用ひたり此等のものは悪臭甚しき故其部落の人々の甚だしき悪人か又は病の悪魔の極めて猛悪なる者にあらざれば此悪臭を嗅き必らず逃去ると云ふ殊に硫黄は病を撲殺すと云ふ數年前著者は自宅に於て石炭酸を用ひしことありしがアイヌ之を嗅き著者の物体崇拝的神なりと思ひ誤りしことありたり

歐米に於てバクテリアを病原とするが如くアイヌは活潑なる病の悪魔ありて病を生すと云ふ然らば歐米人の病原も亦アイヌの考ふる所と同様なるが如くあれども其實は大に異なるなり歐米人の所謂バクテリヤ即微菌は胎生物 Embryo なれどもアイヌは生ける悪魔にして之が病の種子又は原因となり悪魔には靈の生命ありて智慧分別あり行爲の自由ありと思ふ歐米人の所謂バクテリヤ即微菌には靈性なく道

理の辨別なく其生命は植物的生魂あるに過ず故に大に違る所あるあり

前に記せしルイシユツイナヲ即軍用棒又はコタンキツカライナヲ即村を防ぐイナヲと云ふ名稱を付したるは村に病の侵入するを守護するを指す語にして固より軍用棒は只虚飾にあらずして人を殺害するに用ゆべきものなり古昔軍人か軍用棒を以て敵を殺害せし如く此イナヲも亦病の悪魔を防ぎ戰ひて殺すなり而して若し病の悪魔が此イナヲに近寄るときは忽ち撃殺ざるべしと思ふなり

第十五章　イナヲは生ける仲保者か

る事

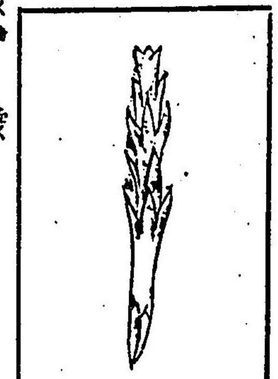
イナヲは使者なり。酒を造るにイナヲを用ゆ。イナヲの地獄に送らる事。惡魔を拜む事。病人の爲に造るイナヲ。萩イナヲ　削り屑イナヲ。

イナヲは確かに生ける使者なり生ける仲保者なりとはアイヌの常に考ふる所にして其靈は人間と諸神の間に往來するのみならず時としては地獄にさゑも往き人間の爲めに惡魔を宥和ると云ふ其然る所以は次に記載する二のイナヲの事を見て知らるべし

新年又は收穫其他の時或場合に粟にて酒を造ることあり此酒を造る時は必ずイヌンバシユツイナヲ Inunba-shutu inao. 即精製する棒イナヲ

を造る此イナヲは火の神に贈らるゝものなるが故に粟酒を造る時酒の粕を少しく持ち行かしむ讀者が今此處に示せし圖解を見ば其頂上にある穴を見らるべし此穴はセツト ぴのt. 即坐席と云ふものにして其處に酒の粕を置くが故なり此坐席に粕を置きし後諸の神に酒の滴を供へ又格別に火神を拜み曰く(嗚呼神的祖母よ汝に向つて我々は此酒を飲み又汝にイナヲをも捧ぐ願くは此家族を惠ませ給ひて凶惡を追拂ひ我等に災厄のあらざる樣に守り給はんことを)と此祈を爲せし後前に云へる精製する棒なるイナヲに祈りて曰く(嗚呼精製する棒なるイナヲよ汝の頂上に置かれたる酒の粕を火の神に持行き給ひ我等に代りて彼が我等に與へ給ひし總ての惠を感謝し給ひて彼に我等の狀情を知らせ給ひ其惠常に我等の上に在らんことを願ひ給へ)と此祈を爲せし後アイヌ恭しく火の神を拜み其間にイナヲを取り其靈を雖の

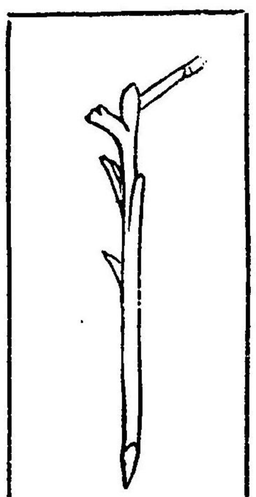
國に送る然れども或時は此イナヲ燒かず家の入口を守る神に捧ぐることあり又此時に火の神を拜み共に其夫なる家のイナヲを拜むなり」此處に示せる繪はニットヲイナヲ Nitne inao.(惡物質)又ニットヲハシユイナヲ Nitne hash inao.(惡しき柴物質)と稱するものにして格別に人の病に惱む者惡魔に憑れたる者に用ゆ而して此イナヲは惡しきものなるが故に惡物質と稱せらるに惡物質と稱するにあらず造る時の場合惡しき故に惡物質と稱するなり



(Inumba shutu inao)
Refining club fetich.
ヲナイヲユシバンヌイ

又此イナヲは病の惡魔に送らるゝものなるが故に惡物質と稱せらる此イナヲを造る時にニイトヲハル Nitne haru. と稱する雜炊 Soop. を造り共に之を送る此雜炊は魚の骨腐れたる野菜又種々他の善しからざる食物を混せて煮る之を煮終りたる後イナヲを火の邊に立てゝ其前

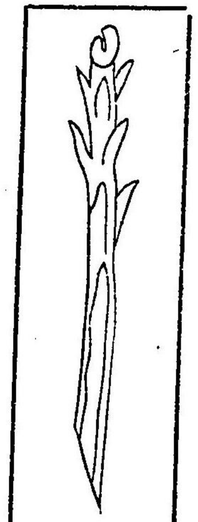
に雜炊を置きたる後祈りて曰く(嗚呼惡物質よ此惡しき食物と今惱み居る人の病と其人に憑き居る惡魔と皆共に取り去り地獄に行けよ其處に着すれば再惡魔此世界に來らざる樣に爲すへし今余は汝に食物を與へたり之を持行き惡魔を宥むへし而して願くは其惡しき食物を以て彼に食らはせ給はんことを)と此祈を爲せし後草の房を取り病に惱める人を打ちたる後其イナヲを地獄に遺り病を與へたる惡魔を能く待遇なば必らす癒ゆへし



(Nitne inao)
Evil fetich
ヲナイヲドイニ

是れに由り考ふる時は惡魔を拜むか如く見ゆ而して此處に記せしは惡魔崇拜の極厘かある一端なれば本書の漸く進み行くに從ひ塲合に由りて尙多く其趣旨の顯はるゝことあるべし火の邊にて前に記せし

祈を爲せし後其イナヲと雑炊を外へ持出し弊の前に置くなり其持行きし人惡魔に向つて祈りて曰く(嗚呼怒りたる惡魔よ嗚呼不淨の惡魔よ此イナヲと食物を受け給ひ而して早く今の病人を癒し給ふべし)と此の如き祈と儀式をする人は又再其家に歸りて前に記せし草の房を以て病人を打ちて追拂ふ


(Shutu inao)
War club fetich
チナイツユシ

或時著者は此處に示せし繪の如き形に造られたる一のイナヲの或病人の小屋に立てられて拜まれしを見しことあり其時如何なる詞を以て祈を爲せしか余輩は今之を忘れたりしが此事に就て一事の記臆することあり其アイヌの思ふに此イナヲを拜みし後其靈は地上諸所に歩き病人の爲めに惡魔を搜し彼と共に相談し病人に如何なる藥を與ふれば癒るかと尋たりと此

の如き場合にてアイヌ其物質に向つて願ひし事は即總ての惡魔の所に往き人に病を與へし惡魔を搜し出し之に逢はゞ速かに其病の詛を取去るが如く願ふこと是なり之を丁寧に巧妙に爲す時は必らず病の平癒するものなり然れども若し之が巧妙に爲されざる時は必らず死亡すべし

アイヌ尙今一種のイナヲ物質を造り之をハシユ

(Hash inao)
ハシユイナイチ

は一尺程の短き棒を切り又上を割り矢筈を造り削り屑を垂らしむ此處に示せる繪の如く造くるなり此イナヲの上端に穿ちたる穴は之を其口と稱せり此イナヲは誠に重要のものにして或は柳の木或は水木或はドスナラの木或は桂或はアホダモ或はホウの木或は楡等其土地

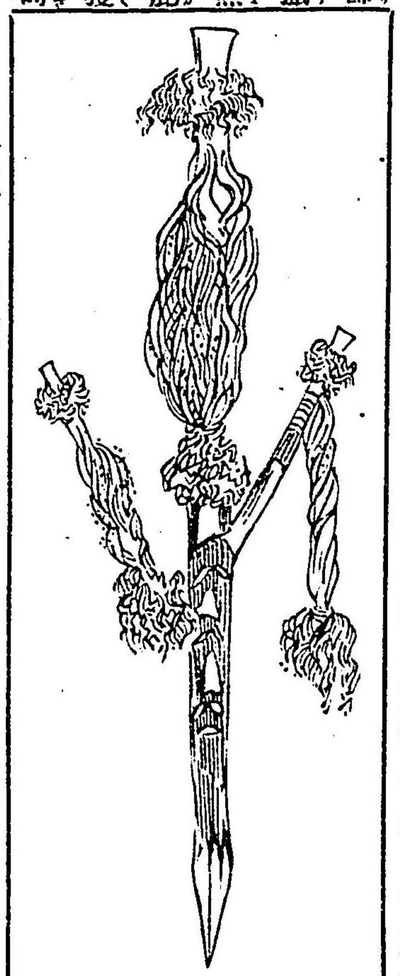
Hash inao 即柴イナヲと稱す之を造るに

に於て得るに便利ある木を以て造らる而して此種類のイナヲは殆んど總ての神に捧げらるゝものなり獵師漁夫等は屢之を造らざるべからざるが故に蓋し種々の木を用ゆるを便利なりとす漁夫は必らず定繫場に此イナヲを立て祈りて曰く(嗚呼水に住む大なる神よ嗚呼水神よ今我等は魚を捕りに行かん)とす何卒此柴のイナヲを受け納れ給ふて我等を守護し給ひ我等に多くの魚を捕らしめ給へ願くは今日我等の漁豊ならんことを)と云ふ

前に説明せしイナヲの外に札幌博物館に於て樺太アイヌの用ゆる一種のイナヲを見たり其繪は此處に示すが如し或人の話に依れば之を海邊に立てし海神に捧げられるものなり其海神の務は魚類を蕃殖してアイヌに捕らしむるなりと云ふ

以上二章の中に屢削り屑即物体屑と云ふ詞を用ゆるの必要ありしな

り之をイナヲキケ Inao kike. 英語にて Fetich Shaving と稱す其名の如く唯木の削り屑たるのみなり如何なる他の物質あるもアイヌは必らず此削り屑を以て包むなり總ての世襲什器と寶物は必らず此削り屑を以て飾とす獵師が熊又は鹿を捕獲せし時は此削り屑を以て其頭を飾るのみならず漁夫も亦屢其舟を飾ることあり又河海に於て神或は惡魔に投與るなりアイヌのツウスグル Tusuguru 即修驗者は常に之を懷中して居り人より魚又は熊鹿等の肉を土産として贈らるれば日本人



Inao of Saghalien Ainu
樺太アイヌのイナヲ

の熨斗を用ゆる如く削り屑を用ゆ此等の用方を考ふれは誠に削り屑なる物質は貴重のものと見ゆ唯目以て見れは格別美しきものにあらずと雖禮儀又は教法に於ては必らず貴重なるものなりと思ふ余輩思ふに恐くは此等のものは聖別の表號あり或は物を格別なる所以をて特別に置きたる表號な長山林より生木を採り來りて火の傍に坐り其皮を剝き以てイナヲを

(Inao'kike)
Fetich shavings.
ケキチナイ

りとす

讀者は今迄記せし事を推考しアイヌの教法に於てイナヲ物質は甚た貴重のものなるを知らるへし諸の神を拜み祈を爲すに屢之を造りて用ゆるなり故に人病に罹る時其親屬又は村の酋

造るなり之を造りたる後爐縁に立て火の神に祈り病人を憐み救ふことを願ひ火の神に向つて(使者又は養ふ者)と云ふて今造りしイナヲを持ち造物主に往き今のイナヲを造りし人の祈を聞きて火の神此病人の病を癒さんことを願ふ此處に含む趣旨は造物主は最高き榮光あるものなれは自から親しく病人を癒さす火の神をして癒さしむるなりと云ふ

アイヌか山に往き獵をする時宿泊する爲め小屋を造りし後恭しくイナヲを造り火の傍にも小屋の内外にも置き彼等只管に祈りて曰く(嗚呼火女神よ我等此イナヲを汝に捧け奉る今夜我等を守護し給ふて明朝目覺めたる後豊なる獵獲を與へ給へ)と又飲用水を汲む泉に到り祈りて曰く(水火神よ我等汝の泉に來りて飲む願くは我等の捧け物を受け納れ給ふて我等を健康にし我等を守護し給はんことを)と又其翌日

今將に獵を爲さんとする時又イナヲを造りて大なる神に捧げ其時火女神使者として神に祈り多くの獸を穫んか爲めに願はしむるなり

（第三圖　沼尻眞業氏寫眞）

AN AINU VILLAGE.

落部のアイヌ

第十六章　アイヌの住家

住家の生命。住家の心。住家を造る事。住家を祈る事。聖別なる家内の東隅。倉庫の事。火事を恐るゝ事。幌別の家屋新宅の祭。住家を燒く事。

第十五章の終に於て著者は削り屑イナヨは及ぶ限り説明せしが尚今一要用の削り屑イナヨあり之をチセサンペ Chisei sambe と云ふ即家の心又は家の脈と云ふ義なり此イナヨは多く窓、戸或は梁に懸けしを見る此イナヨは柳朴、桂、水木の類を以て造らる如何なる住方にて之を造るか余輩知らずと雖甚だ威勢あるものにして住家の各所に立てられ各自から生命を有するものなりとアイヌは信ず又住家が此世にて朽

ち果れば來世にて天國に行き其家に住みし人々と共に天國に於ても亦住ふべしと信ず何となればアイヌの信ずる宗教に依れば人も物も來世にて生けるものなりと信ずるが故なり

我等西洋人に於てはアイヌの住家を頗る安樂の居所とは思はざれども

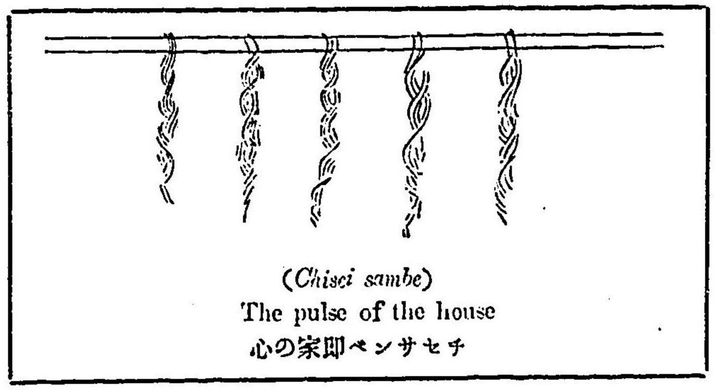
アイヌは身体を愛護し安樂に生活することを全く知らず唯僅に飢寒を防ぐ衣食を得れば滿足に思へり遠くアイヌ部落を望めば川の邊に建られたる家誠に美しく見へ又或處にては家々の家根奇麗に茸きたるを見る然れとも其家に近寄り熟視すれば毫も美しき所なく或人の云へるに數週間或は數日或は數時間或は數分間其小屋に居れは他き果てゝ早く日本人の旅宿に歸り安樂に宿泊せんことを思へりアイヌの住家は総て壁粗薄なれば風吹入り或時はランプ又は蠟燭をも點すこと能はず著者は曾て風を防き蠟燭を點さんと欲し周壁に薄綠莚

を立懸けしが風強く何の益にも立たさりし故止を得ず早く寐床に入り寐れるが床は裸板にして甚だ堅きを感したり然れとも數週間耐忍せし後は板にても安樂の寐床になりしかとも枚は温熱を保たさる故冬に至りては安樂に眠る能はさりし今も尚記憶に存す十二月八日の夜二個の德利に湯を入れ藁にて口を爲し之を胸部と脊部に置き寐しが口より湯溢れ出て我寐衣も寐床も皆堅く氷り寒さに堪へ難きことありたりアイヌ小屋は其安樂に眠を取る能はさること此の如くなるに依り暖温器には湯タンポを用ゆるの外あからん又アイヌ小屋の屋根には乾魚あり惡臭鼻を撲つ爐邊は煤煙眼に入りて常に涙を溢さるへからず又蚤、小金虫、剪刀虫其他不潔のものゝ多きは言を待たず蛇も鼠、雀の栖を捜す爲め屋家の内を這ひ廻ることあり而して夏に至れは蚤に苦しめらる或朝著者起きて我体を見しに体中多く蚤の刺痕あり

痛みたり然れとも不思儀なる哉此時より今に至るまて幾數万の蚤に刺されるも微痛を覺へさるに至れり讀者よアイヌの家に往かんと欲し給はゝ先つ蚤取藥とハッキリと云ふ目藥を用意せらるへし

アイヌの家を造くるには先つ屋根より始む即梁木を地上に置き斜に丸太を立て木皮又は藤蔓にて棟に取付け家根地を造り此骨組の出來たる後地上に堀立てたる五六尺位の股ある柱杭に乘せ笹又は葭を以て家根を葺けり男女を問はす皆出てゝ働き其家を造るに勉めり家の骨組立てらるゝや否直に前に記せしチセサンペと云ふ家の心なるイナヲを造り此處彼處に懸け家の神々に下に記す祈を爲す曰く(嗚呼家の神よ此家の守主よ我等は汝を拜む故我等の祈を聽入れ給はんことを願ふ古昔火の女神天より遣はされし時一軒の家彼の女神と共に降り其家の骨組は木其壁は葭にて造られ家の心も亦共に降りたり

抑神か其家を降して云ひ給ひけるは此家は火の女神と共に人々を守護し古くなれは其代に新らしき家造られ子供等生れて育らる神よ此家出來上りて其心も捧げられたり此故に火の女神此家に住みし人々の健康を守護し給へ我等は汝にイナヲを捧げ奉る願くは此家に住む



(*Chisei sambe*)
The pulse of the house
心の家即ペンサセチ

人々に病難なき樣に守護し給はんことを)と家の神々に此祈を爲せし後火の女神と其夫なるイナヲと共に拜み酒を供へて之を飲み種々の物質をも造り大なる饗筵を爲し醉を貪ぼれり最初の家の元始に關する口傳あり左の如し

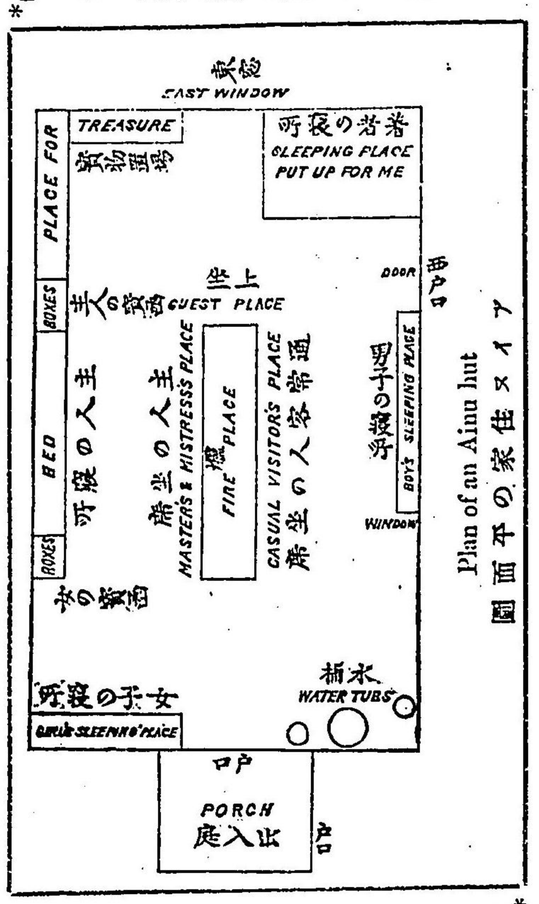
(火の女神と共に最初の家は天より降りたるが

之を稱してイレスカムイアエアヌッンブ Iresu kamui aeanu tumbu と云ふ即神的養者の置かれし室と云ふ義なり又チランゲッンブ Chirange tumbu とも稱す即降りし室と云ふ義なり或は又カムイカッンブ Kamui kat tumbu とも稱す即神の造り給ひし室と云ふ義なり

殆んど皆アイヌの住家は家根の下に二の穴を開けり一は東に一は南の壁にあり即是窓なり其窓の外に葭又は笹を以て造らし簾を置き又或時は雨露を凌ぐ爲め木の雨戸の如きものを置くことあり其簾を置くには梁の上に糸を通して室内より自由に上下するなり家屋に煙出しなしと雖屋根の両方に破風あり之に穴を明けて煙を拔きアイヌは充分ありと思へども余輩の經驗する所にては眼にも咽にも害あるものなり家の西に戸あり戸の外にセム Shem と云ふ出入庭あり此出入庭の南壁に外に行く戸口あり此庭は種々に使用せられ薪を置き或は臼

を搗き或は豆の莢を取る等の事は此處にてするなり犬も亦此處に寢るなり

大なる住家は南壁に入口を設け即東の壁に近き所に差込雨戸の如き戸を*は莞も雨戸もあるなり而して雨戸を閉るは人の不在又は寢る時のみに限れり



Plan of an Ainu hut
アイヌの家住居圖

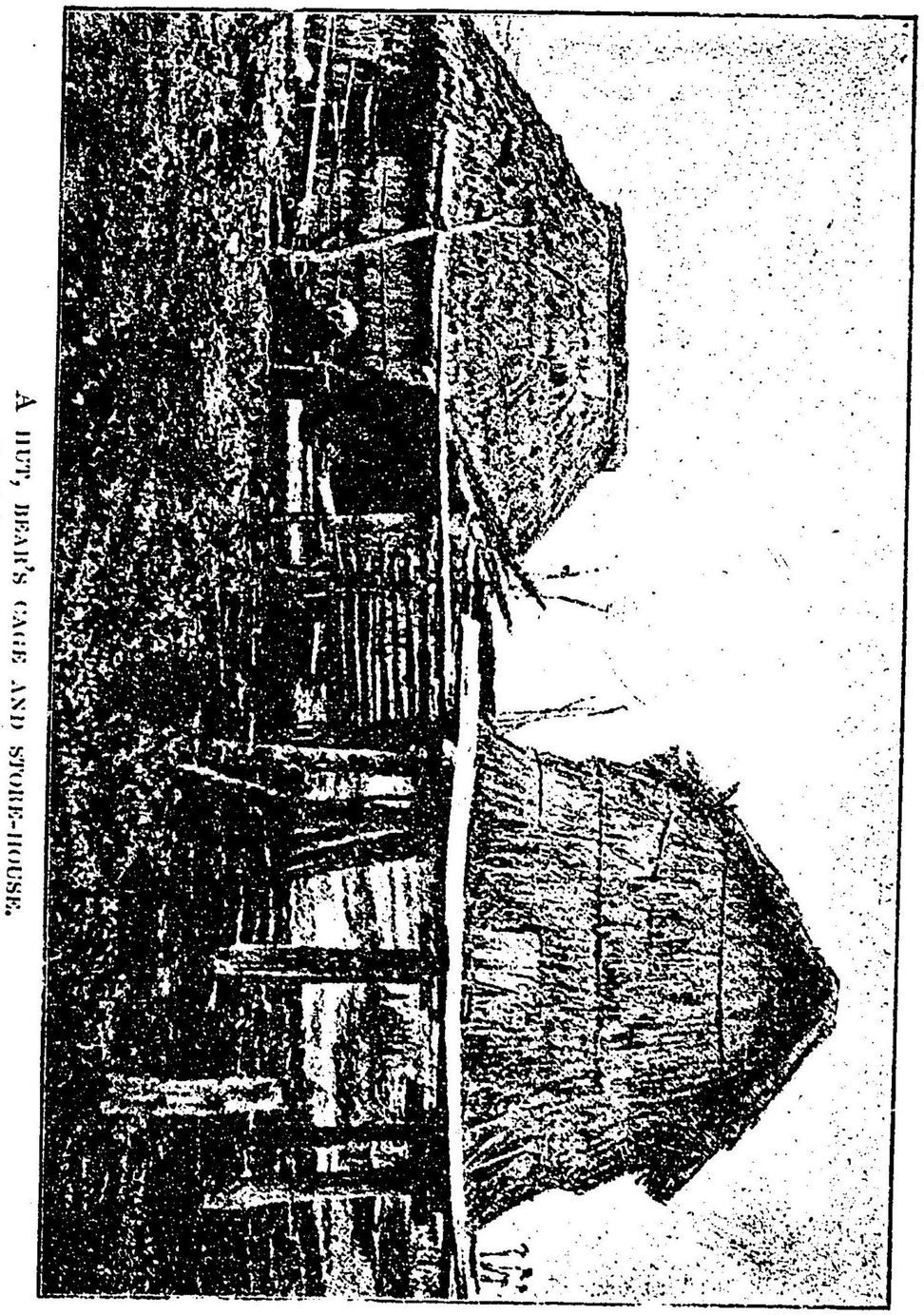
付け出入*庭に在る外の戸には簾の如き莞蓆の類にて塞げり家の内の戸に

爐縁より東窓に至る間を上坐として格別に聖別すべき所とす故に敬ふべき客人を坐せしむる所に用ゆ東北の隅は寶物又家族の大事なるイナヲを置く所とし其處の梁の上に相續什器、古劒、弓、矢、鎗、魚扠等を藏置するなり而して此等の物に削り屑も着け置く又其傍に主人の重要なる物即禮服等を容るゝ箱も置けり

東窓は誠に聖別のものとし堅く守るべき禁制あり其說話の一部分を記せば左の如し

東窓は慶祝すべき樞要の所にて最高最尊の諸神を禮拜し祖先を祭祀するには此窓にてするなり又イナヲを造り之を外の幣に置く時は先づ火の傍にて造り聖別したる後戸口より持ち行かずして此東窓より差出すべきものあり又熊、鹿、鳥類を獵して持歸る時も亦此東窓より家の内に入るべきものなり故に東窓を稱してイナヲクシブヤラ Inno ku

東京印刷株式會社印行



A HUT, BEAR'S CAGE AND STORE-HOUSE.

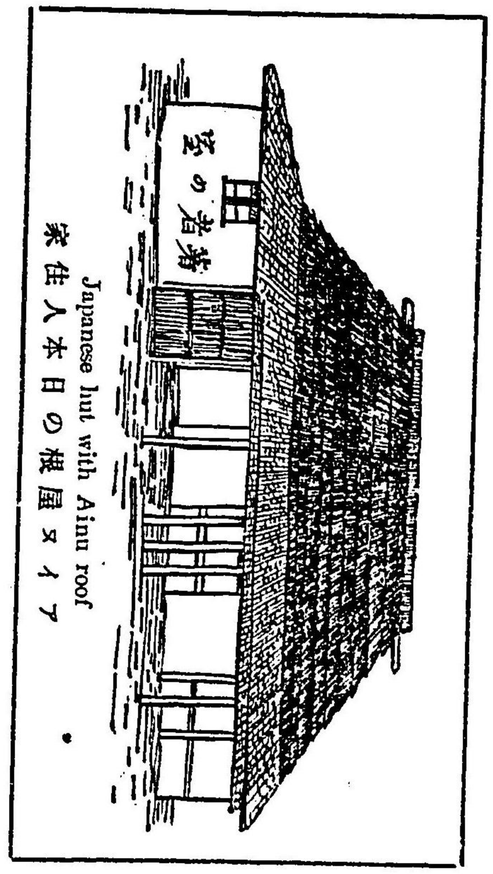
倉及熊の檻・家住のメイア

sh puyam 即イナヲを通す窓と云ふ又カムイクシプヤラ kamui kush puyara 即神の通る窓とも云ふなり此窓は誠に敬ふ可き所にして内より外へ其窓を通して妄に物を投出すことは嚴禁なりとす又外より其窓を通して内を見込むも禁制なり」と云ふ

家の外即家の西側より少し隔たりたる所に婦人の藏あり此藏は長五尺程の柱杭の上に設けられし極少き小屋なり何故に柱机の上に設らるゝやと問しに鼠を防ぐ爲めなりと云ふ各柱杭の上と藏の床板との間に厚一二寸にして凡尺角の板を狹めり故に鼠柱杭を登りても其藏に入る能はず藏の中には家族の食料に供する豆、粟、稗、南瓜其他の作物を納れ置けり或人初めてアイヌ部落を視察し其藏を寫眞に取り其の下にアイヌの宮と記せしを見しが誠に片腹痛く思ひたり

凡て各家の前に路あり三方は畑なり是れは火災を防く爲めなりと云

ふ火事を恐るゝこと深きに由る或日本人の話にアイヌの家に火事あればアイヌは火の女神を恐るゝこと頗る甚しき故家財道具は打棄て置きて顧みずと云ふ然れども余輩の見し所にては是は間違なり余輩はアイヌ部落に於ける火事を二度見しが僅に十五分間にて一家全く燒け盡せり故に少し燒け始まれば家に入り家財道具を取出す暇なきに依り打棄て置くあり火事ありてもアイヌには梵鐘あらざる故男も女も皆外



Japanese hut with Ainu roof
*アイヌ住人本日の茅屋ヲイア

へ出て聲を上けて梟鳥の如くフーフイ。フーフイと喚き叫ふのみなり」アイヌの住家は大小同からず酋長の家は部落中に在る他の家よりも少し大なり或アイヌ初めて結婚する時の家は甚だ小なり第二の家は最初のより少しく大ひあり第三の家は又今少し大なり最初の家は第二の家の出入庭となり又第二の家は第三の家の出入庭となるなり而して純粹のアイヌの家は隘二間に決け一は出入庭の間一は坐敷の間なり或事に關しアイヌは漢東人の如く保守的にして其風俗を變易するは誠に難きことなり數年前に余輩の知れる一人のアイヌ自分の住家に板を付んことを思立ちたるが之を爲す前に村内の人々を招きて酒を饗し又總ての神々の御許を蒙らん爲め酒宴を兼たる祈禱會を催せり

家屋の落成はアイヌに於ては重大の事なりと云ふ何故かと云ふに盛

なる饗筵を設けて総ての神々を禮拜し祖先をも拜むを以てなり此時は女等は朝早く起き出でゝ粟稗を搗き團子を拵へ男は酒を買ひ求めイナヲを造り既に其用意整へば内外の神々を拜み祖先を宥めて後飲食し男は皆十分に酒の足る時は醉へるなり然れども此時多くのイナヲを造り家の内外にも火の傍にも寢所にも東窓及東北の隅にも水樽の傍、出入庭、水汲場畑等にも之を置くなり

此祭はアイヌに於ては甚だ大切の事にして凡ての神々の恩惠を請ふに適當する詞を以て拜まざる可からず若し一にても殘りあれば其神怒り給ひて或は病難或は死亡或は饑饉或は他の災難を以て讎はる例へば泉の女神を忘れて拜まざるときは水を酒らし寢床の神を拜まざるときは眠を妨られると云ふ神々を拜むには男子酒盃を持ち鬚揚著を以て其先を酒の中に入れ二滴づゝ三度各神に捧げ恩惠を請ふなり

例へば或人は火の女神に祈り他の人は寢床の神に祈り又他の人は東方の神を祈り家内に在す或は鍋、鐵瓶、水樽を守る神を祈り又他の人は窓及戸の神を祈り家内に在す総ての神を拜み後男子は外へ出でゝ外に在す総ての神を拜み又此時必らず祖先を拜むを忘れざるなり之を終り男子は皆内に入りて飲食し男子の後に座せる女子にも少しは酒を飲ましむアイヌは各獄を盡し醉を貪りて喜ふ彼等は自分より他人が多く酒を飲みたりと思ふて喧嘩することも屢あり此の如く饗筵を爲せし後家内は抔盤狼籍人々の醜体見るに堪へざるなり何となれば醉倒れて彼處にも此處にも顛々寢て居れはなり

或アイヌの話に依れは古昔祖先等其老母の死する時は其家を燒き拂へる習慣あり何故かと問ふに死して葬られし後老母の靈魂其家に歸り來りて怨恨妬嫉の爲め此家の子孫養子女に禍を爲し不意の變災又